

---

# 君の世界の輝きは

白波 透歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君の世界の輝きは

### 【Nコード】

N4236Y

### 【作者名】

白波 透歌

### 【あらすじ】

異世界の神様を家族に持つ少年、白片凍津弥。放課後の日帰り異世界旅行が日課となっている。彼が向かうのは輝きに満ちた異世界、リベラリーゼ。けれど彼が生まれた地球にも輝いている者達は大勢いる。輝きに憧れた少年は今も二つの世界で迷い続ける。異世界と生まれた世界で綴られ絡まる物語。

## 天藍の旗の下（前書き）

一章とは何時か繋がるかもしれないです。

## 天藍の旗の下

呼ばれたよう気がした。

呼んだのは誰かわからないし、そもそも俺を呼んでいたのかどうかもはっきりとしない。

けれど俺は確かに「誰か」を呼んだ。

その声に応えたのは、遠い遠い世界に根付く誰かで。

その声に手を伸ばしたのは。他ならない、俺自身だ。

青くて白い空。

ここから見える空は青空と真っ白な雲で、半分ずつきれいに別れている。真っ白な画用紙を、半分だけ青色の液体に漬けたように。

学園のグラウンドに寝そべって。大の字で。のんびりと。

芝のグラウンドで、見上げていた。

見慣れている、色の足りない、この世界の空を。

「こんな所にいたのか」

憩いの一時を邪魔するのは何時だって真っ黒な髪の女だ。

寝ている俺をいつの間にか見下ろしていた女。陽元美刃<sup>ヨウモトミハ</sup>。その名の通り綺麗な刃のような美人ではある。けれどいつもなら陽光を照らし返す彼女の顔も、曇った鏡のように陰っていた。

その頬には一筋の濡れた跡。相変わらず、泣いていると自覚していないまま泣いていたんだな。

俺の横に座った美刃に、言い忘れていた礼と謝罪を合わせた言葉を放り投げる。

「悪かったな。全部頼んじまって」

起き上がらず、相手の顔を見ず。俺は謝った。

謝りたくて、謝った。

「いや。元々先生より頼まれていたことだ。気にすることはない」  
先生。俺にとつての爺さんで、今はもうこの世には居ない人。両親以外での俺の血縁で唯一優しかった人。

「それにしても、さ。俺の爺さんって結構知り合い多いのな」

「ん？ ああ、そうか。お前は知らないだろうが、我が家に訪れた弔問客はほんの一部に過ぎないのだぞ。生前で既に多くの知己と別れの挨拶をさせていてな。それを含めれば多い、などという表現が霞む程に、顔の広い方だった。顔が広いというか、世界中の問題に何でも問でも首を突っんでいた、と言った方が正しいか」

美刃は曇った表情のまま、微笑した。

「全然知らなかったよ。病院に入る前は……まあ色々あったけど。いつもは庭で盆栽いじってばかりだったし。友人なんて居ないのかと思ってた」

「とある筋では有名な方だったのだ。お前は知らなかっただろうが」  
「そうだな。俺が何聞いてもはぐらかされてただろうし、な。美刃なら知ってるんだろう？」

美刃と爺さんは師弟の関係にあった。ある意味、俺よりもよほど仲が良く、信頼し合う関係にあったのだろう。爺さんの仕事を手伝っていたとも聞く。

「知っている。だが教えるな、と言われてる」

爺さんが俺に何かを隠していたのは知っている。隠していたってことは知られたくないことで、俺には知らせたくないことだったんだろう。

気にはなる。

けれど俺だつて隠し事はある。結局、最後まで爺さんには言えなかった秘密が。

だから。

「そうか」

とだけ言葉を返す。

「……何故、と聞かないのか？」

「別に、知りたくないしな」

嘘じゃない。

「そうか」

だから。

「ああ」

短い言葉で返事ができる。

白い雲がちぎれて落ちてきた。勿論目の錯覚だ。

俺たちの会話の終わりを見計らったかのように、一羽の鳥が降りてきた。

雲の一部と重なるような白い色だった。

鳩？

そう思ったのも束の間。急降下してきた鳩に似た鳥は、美刃が差し出した腕に掴まった。俺の方を見て小さく首を傾げる仕草が何故か懐かしく感じた。美刃の黒髪と対照的な白い羽の音はとても静かだった。

鳩の足に付いてあった一枚の紙を開く美刃の動作は手馴れていた。短い所作で喪服の内ポケットから新しい赤色の紙をくり直すと、「いけ」とだけ言って飛び立たせた。

青い空に一羽の鳩が飛ぶ。

ちぎれた雲が空に戻る。

手紙を片手で握りつぶす美刃。

それが合図、というわけでもなかっただろうに。

「凍津弥。話がある」

陰りもなく、曇りもなく。反射する必要もない、輝きを秘めた瞳を向けられていた。

「改まって何だよ」

相変わらず綺麗な目だ。

「私と決闘してもらおう」

「嫌だ」

条件反射でいつものように返事をしてしまった。  
さっきの紙に何が書いてあったのか考えもせず。

「お前の意思に関わらず、だ」

いつもならもう少し問答を繰り返すんだけど。この人が来たってことは何か理由があるのかな？

「お待たせいたしました」

恭しく礼をしたのは陽元家のお抱えの使用人。名前は確か……柵さ木花鳥くきかとりさんだったか。視界に入ってから僅か五秒。グラウンドの端からこのグラウンドの中心まで、息を乱さず大きな音も出さずに走ってきた。

陽元家お抱えの使用人は皆怪物のような身体能力である。

「ご苦労」

当然のようにそう言って。

美刃は柵木さんが持ってきた二本の木刀を受け取ると、無言で俺の方に一つ投げてよこした。

俺もそれを無言で受け取る。

「白片様。突然のこと、申し訳ありません」

「いや、柵木さんに謝ってもらうことじゃありませんよ。いつものことと言えばいつものことですし」

俺は幼い頃から自分の家にある道場で、爺さんに剣を習った。

我が家に通っていた美刃と一緒に。

だから普通に手合わせするのも初めてではないし、学園で突拍子もなく刀を突きつけられるのも初めてではない。

だから。

美刃が一度決めた以上、それを曲げることはしない。こうなったら一応とはいえ決着を付けないといつまで立っても追い回されるだろうということも理解している。

けれど。

どうにもおかしい。今の美刃は笑っていない。いつも楽しそうに剣を振るう美刃の表情が暗い。

目の輝きを保ったままだが。表情は笑顔とは程遠い。いつもと違うその表情に少し惹かれ……気になって。

「ルールは？」

受けてみることにした。

「一弾指」  
いちだんし

「了解」

一手のみ、一瞬だけの勝負。

指を構え、弾き、音がなり、響く間の、わずかな時間で決着が着く勝負。

「私が見届けさせていただきます」

柵木さんが美刃と俺を一度ずつ見た。

「花鳥<sup>かとり</sup>、凍津弥に甘い採点をするなよ」

美刃がそう言うとは何故か顔を膨らませた柵木さんは「しません！」と、似合わない大声を上げ、すぐに「申し訳ありません」と謝り、その後俯いてしまった。

採点だか何だか知らないがこれじゃ審判なんてできないだろ。彼女が見てくれてないと俺は美刃に殺されてしまうかもしれないだ。「年上を虐めんなよ美刃。可哀想だろ……柵木さん。お願いします」「は、はい。白片様お気を付けて」「ありがとう」

美刃とこうやって稽古をするときは久しぶりだ。

最近は学園で大勢の生徒の前で戦うことが多かったからな。そしてその結果俺はいつも哀れみの視線を向けられるだけだった。

だからこうやって心配してくれる人が居るのは素直に嬉しい。特に可愛いお姉さんだと尚更。

「相変わらず少女のように眩しい笑顔だな」

美刃の方に向き、少し睨む。



「誰が女だ。俺は男だ」

お前や柵木さんの笑顔の方がよっぽど眩しいよ。

木刀を左手で持つ。

半身を自由に動かせるというのは、身軽さ以上に大事だ。

そう習った。

爺ちゃんではない、師匠から。

一弾指はじゃんけんのように、合図に合わせて同時に武器を交す試合形式だ。

二年前に怪我をしない試合、として美刃から教わったルールだ。実際にやってみればそんなことはなかったのだけれど。

始まる前の互いの距離は二メートルから三メートル程度。

見届け人という名の審判が四、三、二、一、二、三、という一定のリズムを口にする。

四、三、二、の間は足以外自由に動いていい。腕を振り回すのも木刀をどのように構えるのも自由だ。

一で足を動かし互いの距離を詰める。

二で構え。

三で木刀を振る。

打突部位は剣道のように面、小手、胴、突きに限らない。全身どこでも有効範囲だ。

相手がどの程度の距離を詰めてくるか、どのように構えを取るのか、構えからどこを狙ってくるのか。

一、二の間で相手との距離、構えから繰り出される攻撃を読み、対処し、自らの思惑を通す。

試合前も試合中も色々と考えなければならぬ、面倒くさい試合形式なのだが。

勝つためには色々と考えなければならぬのだが。

俺に勝つ気は無いので難しく考える必要はない。

一の段階で密着するほど近づけば木刀は振るえないのだ。美刃が少ししか前に出てこないと思った、などと言えば反論もないだろう。それで互いに有効打を放てず引き分け。それで終わり。

けど。それでいいのか？ ただ引き分けて、それが美刃の満足する結果か？

互いの目を縛るように見つめ合って。

「それでは。始めさせていただきます」

俺の考えが纏まらないうちに柵木さんがカウントを始める。

……考える時間はないな。一になった時から勝負だ。

「四」、美刃が眼を閉じた。

「三」、目を開けた。

「二」、腕を伸ばし、木刀を正中線に真っ直ぐに構えた。構えた木刀が壁のように立ちふさがる。

読まれてた、かな。いつもなら大上段に構えるはずなのに。これじゃ突っ込めない。

「一」、美刃がその構えのまま突きを放つように踏み込んでくる。

けれどこのタイミングで突いても反則となり負けの判定を下される。切っ先が当たる手前で止まる、筈だ。

だったら下がろう。互いの切っ先がギリギリ届く程度の距離まで。明らかに木刀が届かない距離まで離れ過ぎれば、反則負けだ。

「二」、十分な距離をとって。防ぐためだけの構えを取る。この状況になった時点で俺に勝ちはない。俺は下がりながらただの木刀で有効な打撃を打てるほど肉体を鍛えてはいない。

美刃は先程の突きを放つような攻めの姿勢と違って変わり、木刀をまるでありもしない鞘に納刀するように構えた。

木刀で、居合？

「三」、木の棒をぶつかり合わせた甲高い音が耳に届く。

俺の左手から木刀は無くなっていた。

「花鳥、何点だ？」

もう俺を見ていない美刃の声はいつもと違って低い。

「……3点、です」

柵木さんの俯瞰するように見つめる眼の輝きは冷たかった。勝手な妄想だけど落胆の色が見て取れる。

三点つて……百点満点中、かな？ それほどに先程の俺は無様だった。

実際何もしていない。一步下がって手にした木刀を弾かれたただだ。

俺は背後五メートル程に落ちた木刀を拾いに行く。

美刃は「そうか」と言ったあと。

「凍津弥。手間をかけさせた。また明日、学園でな」  
別れの言葉が無表情のまま口にした。

結局。俺は、美刃には必要とはされてないってことだよな。

「お疲れ……美刃。柵木さん、これありがとうございました」  
柵木さんの手に拾った木刀を渡す。

「は、はい。凍津弥さんこそお疲れ様です。……失礼します」  
……柵木さんに名前でもらったのは久しぶりだな。

そんなことを考えながら。遠くに歩いていく二人の背中を見ていた。

主と従者の二人は。

グラウンドを足早に去り。

俺は一人で空を見上げるだけの、静かな世界が戻った。

情けねえの。

何か試されてるんじゃないか、だ。

そんな考えは甘え以前の問題だ。俺の自分勝手な想像だ。誰かに

頼りたい、っていう俺のちっぽけな心が思い描いた。

結局俺自身だけじゃ何もできないんだ。  
なあテーゼ。

こんなときどうしたらいいんだ？

………返事はない。また寝ている、か。

結局美刃が考えていたことは何一つわからなかった。  
加えて俺はみつともない姿を晒したただけだった。

「はあ。なっさけねえの」

また横になった俺は、空に向かって独り言を呟いた。

「何が情けないの？」

空から蒼色が溢れ、独り言に対する返事が空から返ってきた。

勿論錯覚ではない。

………ティノアか。

空から降りてきた少女は、何時だって青空を凝縮したような爽やかさを保ったままだ。

こいつ越しに見ると空は常に全てが蒼くなる。比喻ではなく実際に。白い雲も蒼く。青い空も蒼く。

「別に。何でもないよ」

「そう？ でもイツヤ昨日からずっと不機嫌そうよ。何かあったの？」

「昨日も言っただろ。爺さんが死んだんだよ」

「ふう〜ん？ それがどうかしたの？」

ティノアは俺の言った意味が分からない事を表現するように首をかしげた。

「いや。別にになにも」

ティノアにとってはなにも関係がないのだから。

「ねえ、もう時間よ。行きましょうよ」

「もうちょっと良いだろ？ ちょっと疲れたんだ。休ませてくれよ」  
「だあくめ！ ミネアもリディアもイツヤのこと待ってるんだから」  
ティノアは俺の腹の上に座って身体を揺らす。軽すぎるその身体を。

「ったく、よ！」

俺が下半身で勢いよく立ち上がるうとするのに合わせてティノアは宙に浮く。ティノアの膝が俺の頭の高さくらいに浮かんでいた。立ち上がったって空を見る。

ティノアと比べて色褪せた空を。

「ふう」と大きく息を吐いた後。美刃達とは反対方向に歩く。芝を踏む音は一つで。重なることはない。

空を歩く少女と二人。

空を舞うことが当たり前前の、異世界の神様と共に進む。

反対の道。

「なあ、ティノア。本当に行かなきゃだめなのか？」

一本の樹の傘の下。辺りは何年経っても変わらない木々で囲まれた場所。

学園とは近くにありながら、決して隣にはない場所。

ここは世界と世界を繋ぐ通り道。

「当然よ！ だってイツヤはもう戦力として数えられてるんだから！」

「戦力って……あのゲームのだろ？」

「ゲームじゃないわよ！ 戦争よ！」

戦争。

互いの命を削るわけでも、命を賭けて戦うものでもない。  
死なないことが保証された、神様の御膝下での争い。

「あんまり、興味ないんだけどな」

「な〜に〜よ！ イツヤはミネアがゲロゲロカッパと一緒にあって  
もいって言うの!？」

「ゲロゲロカツパって」

カエルなのか、カツパなのか。どっちだ。っていうか人間か、それ？

「でも二人がくっついたら二年に一度行われるげー……戦争も無くなるんだろ？」

「そんなことはどうでもいいの！ 私はミネアがあんな奴と結婚するのが許せないの！」

「嘘付け。お前は人間が結婚しようが死のうが気にする奴じゃないだろ。イベントが一つ少なくなるのが退屈なんだろ？」

「……さすがイツヤ。私のことは何でもお見通しね！」  
「家族だからな」

ただの血縁じゃなくて。家族。

「そう！ その家族の頼みなんだから聞いてくれたっていいじゃない！」

家族、か。

俺はもしかしてただ必要とされたかっただけで、必要としてくれるなら誰でもよかつたんじゃないか？

今の俺じゃ答えは出ないよな。

それにここまで来たら同じことだ。

「さっさと行こうぜ。でもあんまりつまらなかつたら帰るからな」

「もう。今日のイツヤは本当にからかい甲斐がないわね」

そう言ったティノアは片手を突き出し樹の幹に触れる。

蒼い光が樹の幹に、枝に、葉に。次々と伝播していく。

蒼が充足して、青い空と蒼い地面の境界が不確かになる。

蒼蒼として蒼蒼と。

留まることなく広がっていく蒼い世界。

樹は蒼い光によって溶かされ、地面に水たまりのような円を作る。

「行きましよう」

「はいはい」

蒼い地面に頭から突っ込む非常識なティノアと違って。

俺は恐る恐るといった言葉がピッタリと合うような仕草で、片足から沈んでいった。

さあ行くぞ。

色鮮やかな輝きの世界。

区切られた世界の一つ。

蒼の種都へ。  
クラリシア

地球と根で繋がっているながら。多くの者がそこにあると認められない世界。

世界の名はリベラリーゼ。

多種多様な輝色レディアンズという名の輝きを与えられた人々が、輝きの根に

守られて生きている世界。

彼も彼女も、まだ本当の互いを知らず、知ろうとせずに生きている。

だが、もう知らなければならぬ時が来ている。

二つの世界を巡る為の、光輝の軌跡を描く枝が。

既に、芽吹いているのだから。

## 白い欠片が紡ぐもの（前書き）

小説というものを初めて書いてみました。稚拙な文章や文法は多々あると思います。お目汚しになるとは思いますが、よろしければご覧ください。

思いつきで書いてある部分が多くありますので訂正がよく入ります。ご容赦ください。



## 白い欠片が紡ぐもの

瑠璃色の木漏れ日が照らす景色を入口に。冷たい家族と出会った。停滞を打破するフィナーレを響かせ続ける劇場を通り。留まることのできない幻葉と出会った。

地表に根を生やし、天井に枝を生やした褐色の地下街を抜け。夢が現実の眠り姫と出会った。

天を突き、空を埋め尽くす紅色の花傘の下。輝きの園に咲く棘のない薔薇と出会った。

水晶のように透明で荘厳な木々の根と、世界の内側に建てられた教会の中で。今にも碎けそうな白い苗木に出会った。

俺は様々な輝きに出会い続けた。

独りになって。

一人ではなくなつて。

独りじゃなくなつた。

寝てはいけない、寝てはいけない！

教室の自分の席で俺は強く念じていた。しかしそう思いながらも、逆らえない眠気が俺の身体を襲っていた。

睡眠欲にならいくらでも対抗できる。自慢じゃないが四日間の徹夜なんて朝飯前だ。俺の中にいる目覚まし時計の力を借りればいくらでも起きてられる。

しかし、残念ながら。今は寝ているのだ。

誰がつて？ それは勿論目覚まし時計がだよ。いや、目覚まし時計って言うのはもちろん比喻なんだけど。それに目覚まし時計というあいっは怒るんだ。

ちゃんとテーゼと名前で呼ばなくては。

(テーゼ！ おーい！ 起きてくれ！)

頭の中で、俺に根を張る 樹 に呼びかける。

しかし返答はない。

だがそれも当然か。昨日あんなにもはしゃいでしまったのだから。今くらいゆっくりと眠っていても文句は言えない。

いつもは授業みたいな練習みたいな生温いことばかりだったのに。何で昨日はあんなに……。

いやそんなこと今はどうでもいいんだ！

俺は今、寝てはいけないんだ！

寝てしまえば放課後の日帰り異世界旅行に行けなくなってしまう！

補習、調教、体罰、訓練。そんなことに時間を使っている暇はないんだ！

けれど。これには対抗できそうにない。睡眠薬なんて初めて飲まれた、というか食わされたがこれは駄目だ。どうやっても耐えられない。こうやって無理矢理唇を噛んで意識を保つのが精一杯だ。そしてそれも限界だ。目蓋が、俺の視界を閉ざす。ゆっくりと。真っ暗な世界に俺を誘う。

「おやすみ、凍津弥。次に会うのはお姉ちゃんの前だから楽しみにしといてね〜」

眠る直前に。楽しそうな声で。死刑宣告を告げられた。

「おやすみ、私の」

白片凍津弥しろかた いっぢまは眠っていた。

彼の友人が、彼に対して用意した睡眠薬が入った料理を食べたことよって。

彼の身体は、今も彼の所属する教室の一席にある。しかしそこに宿る意識は別の場所に飛んでいた。彼は自身の記憶の奥深く、己の内へと。己が未だ理解していない、白片の血が受け継ぐ記憶の底へと。

白片家というのは普通の人間には持ち得ない魔力を行使して、人々を守る魔術師の家系だった。人間とは異なる者達や人に害為す者たちと戦う家系。

魔術そのものは科学の台頭と浸透によって淘汰されてきたが、受け継がれる力が失われることはなかった。親から代々受け継ぐ魔力と、自らが生み出す魔力。それらは複合され強くあることはあっても弱くなることは無い。常に親以上に魔力を持つことが絶対とされた、才能が保証がされた者たちである。

凍津弥の祖父である白片充弥しろかた みつやは日本を代表する優秀な魔術師だった。日本古来より紡がれたその剣技を使いこなしていた剣豪。生き残ることに特化させた防御のための魔術と、必殺の剣技を併せ持った魔術師にして剣士。

魔術師としての働く者達の平均寿命は、魔力のピークである二十歳を過ぎてから十余年である三十代前半と言われていた。任務の最中に魔力の量が少なく殉死する新人が多いのも理由ではあるが、その多くは引退が理由である。魔力というものは三十代、遅くとも四十という年齢を迎える頃には完全に消え去る。

魔術師の魔力は有限である。魔力というものは二十歳を迎えるまでしか生み出されないものであり、それを過ぎれば後はいかに回復しない魔力を効率よく使うかが求められている。しかしそれは己の

命が賭けられた戦場の中でも己を律する事が不可欠だ。戦場というあらゆる激情が渦巻く中で、自らの力の底を弁えながら戦える者は多くない。戦闘の最中に魔力を使い切つて無防備となり、無抵抗に殺される術師というのは珍しい話ではなかった。

魔力の消失は魔術師としての最後である。

しかし彼、白片充弥は彼が寿命という死期を悟り引退する三年前まで戦場にいた。残り少ない魔力を行使し、命を散らす最前線で戦っていた。それは無駄な魔力を一切使用せず、其々の戦場において最適で最低限な魔力で戦い続け、生き残ってきた所以である。普通の魔術師よりも多くの魔力を持ちながら、溺れることなく己を律し続けた結果であり成果である。

『御劍術師』

彼は貴人や天皇が佩く剣と同じ名が与えられた。それは彼にとつて荣誉であり、また彼を縛る戒めとなっていた。

彼は守るべき者達を守れなかった責任を、後悔を、自責の念を抱きながら。最後まで戦っていた。

彼が残り少ない魔力を、命を、しぼり尽くして最後に戦った相手は彼の孫である白片凍津弥だった。

凍津弥が十三という年齢を迎えた年の事であった。

充弥の息子であり、凍津弥の父でもある白片燈弥しのかたとよもまた優秀な魔術師だった。親が培った魔術の才能というものは、第一子にのみ受け継がれる。魔術師の家系で一人目の子供は多大な期待と願いを込められて生まれるのだ。事実、燈弥の妹は微細な魔力の才は有つたものの、親からの魔力は一切継ぐことはできなかった。

燈弥は十を迎えた頃には父である充弥と戦場を共にし、実戦の中で生まれつきの膨大な魔力を制御する術を覚えていった。彼は幾重

の戦場を経験し、白片家の歴代でも初代と並ぶ最強の術師と呼ばれるようになった。夜でありながら周囲を昼の明るさに変えるほどに濃く、明るい魔力を用いて戦場を丸ごと制圧する無類にして無傷の魔術師として。

彼は異例の若さで当主を継ぎ、神に供えるに足る燈りを持つ存在として『神燈』と呼ばれた。

しかし。十九という年齢を迎え、未だ増え続ける魔力を持って余した燈弥は迷い始めていた。自らの力は何の為にあるのか。何故このようなただの魔術師とは異なる、超える力を与えられたのか。彼自身の内側には増え続け、溜まり続ける魔力と共に、律することの出来ない揺らぎが生まれていた。

二十という、魔力を生み出すのは最後の年を迎えたとき彼はある女性と出会った。

白片家の当主として、彼には幾つもの縁談の話が持ち上がったが、彼は自身の内にある問題に対して答えを出すまでは家庭を持たないと決めていた。普通の魔術師ならば自身の魔力が絶頂期である二十歳には家庭を持ち、子供を為すのが魔術師の家庭としては常だったのだが。彼の有り余る魔力は減るところか未だに増加の一途にあった為問題とされなかった。それは彼にとっては全く問題のない話だったが、一部の魔術師にとっては重大な問題になっていた。

燈弥は自らが戦うべき相手も守るべき相手を意識しないまま、只々人という記号を守るために敵と戦い続けていた。

そんな時、彼はとある一人の女性に出会ったのだ。

それは初めて統弥が守れなかった人だった。

彼は死者から託された願いを胸に、怪界へと向かった。

日本の地の底と繋がる異界、妖怪が跳梁跋扈した下界ならぬ怪界。日本に住む魔術師たちはその世界のことを畏怖し、軽蔑していた。自分達人間を食物にし、人の世を惑わす下賤なる者たち。けれど強靱な身体と人の理の中では有り得ない魂を持つ者たち。しかし人と

は異なる知で生きる者たち。

燈弥は白片家当主の座を捨て、単身で怪界けかいに乗り込んだ。

怪界けかいを含め、異なる世界には決して足を踏み入れるべからず。それは世界中の魔術師たちが守るべき不文律として存在していた。しかし統弥にとって世界の慣例と亡き女性の願いは比べるべくもなく後者の方が重かった。

そして一年が過ぎた。彼は怪界の深奥に住む王である『鬼』を討ち滅ぼした。そしてその二メートル大もある『鬼』の首を用いて怪界へと続く道を封じ、一人の少女を救い出した。

彼は生まれて初めて自身の力を存分に行使した。

彼は『鬼』との戦いで初めて全力を振るった。

そして戦いに勝利した彼は、戻ることのない力の大半を失いながらも。その力を使うための理由を手に入れていた。

燈弥が助け出した少女の名は碓炒いさつき月裳さゆり裕理。

とある魔術の才能を受け継いだ、白片家よりも由緒があり才能があり魔力がある碓炒月家の生き残り。燈弥が愛した女性であり、鬼を滅ぼすための贄として生まれた少女だった。

燈弥に助け出されたとき裳裕理は十六という年齢だった。

互いに惹かれあうように出会い、互いに求め合う物を内に秘めていた燈弥と裳裕理。

彼と彼女が愛し合うのに時間は掛からなかった。

凍津弥が生まれたのは彼と彼女が出会った一年後の話だ。

そして燈弥は凍津弥が生まれるのと時を同じくして、白片の当主の座と共に魔術師を後腐れなく辞めた。正式に、しっかりとした手順に則って。

それは白片燈弥と白片裳裕理がその命を奪われる九年前の話である。

白片凍津弥は魔術師ではなかった。

彼は膨大な魔力を持っていた両親の才能を一切継がず、己として一切魔力という才能を持たない子供として生まれた。加えて凍津弥は病弱だった。普通の魔力を持たない人間の中でも貧弱で、走るだけで咳が止まらなくなるような子供だった。

無能な人間。無意味な生。無価値な子供。魔力の才能が絶対であり、着々と培ってきた血筋を台無しにした白片家の恥さらし。彼は白片家の親類や、同じ魔術師から侮蔑と嘲笑の対象となっていた。

しかし凍津弥自身の耳にそれらの言葉が一切届くことは無かった。凍津弥の両親である燈弥と袈裕理が魔術とは一切関わりの無い生活を送っていたからである。

彼らは凍津弥が魔力を継ぐことができないと分かっていた。だからこそ彼らは自身は魔力を残しながらも魔術師を辞め、知り合いが経営する学園で剣術の講師として働いていた。

凍津弥は優しい両親と共に9年間過ごした。自分たちの人生を、子供のために費やした両親に守られて。

そして9歳のとき凍津弥は独りになった。

そして凍津弥は家族に出会った。

白い欠片が紡ぐもの（後書き）

ちよつとずつ書いてみようとと思います。

追加十一月二十二日



## 向けられた瞳の輝きは

「ん……」

夢を見ていたことは覚えている。

けれどそれがどんな夢だったのかは覚えていない。

俺は夢という掴めない幻想よりも、掴まなければいけない未来があるのだ。

目覚めは決して良いものではなかった。

教室の空気は重たい。寝起きの俺の頭も重たい。

そして。目の前には見えていて胃が重たくなるような濃い顔があった。

「おつはよ〜凍津弥く〜ん。今日もよく眠れたかな〜？」

目の前には新任っぽい教師？ いや化粧の濃い教師がいた。大人の女性の年齢というものは見た目ではわからないな。……名前は……  
…忘れた。誰だっけ？

まあいいや。先生なんて皆同じように先生と呼べばいいだろう。

男でも女でも。小さくても大きくても。先生は、先生なのだから。  
「ねばけてな〜い？ 起こしても起きなかったから心配したの〜よ？」

うん。気持ちの悪い喋り方だ。大人が子供っぽい喋り方をしていると  
いうか、野生の狼が人に飼われた子猫のように鳴く気持ちの悪  
さ。

あまり視線を合わさないように話すでしょう。

呪われそうだ。

「はい先生。先生の声はまるで月をも落とす子守唄のようでした。  
お陰様で熟睡していました。ありがとうございます」

思ったことと真逆の感想を述べてみる。俺が寝ていたのは薬のせ  
いだ。薬でも飲まなきゃこんな呪術をかけるのにびったりの声が響

く中寝られる訳がない。

「あゝらそ〜う？ 私の声そんなに綺麗〜？ でもね〜今日は私が授業していたんじゃないんだあ〜」

そうでしたね。さっきまで忘れていた、というか忘れたふりをしていましたけど思い出しましたよ。

「今日はね〜。わが校の行事について、先輩から色々とお話をしていただいていたのよ？ それを堂々と居眠り！ するなんて……」  
黒板の前で、喜劇の脇役のように右往左往しながら喋る先生は見ていて面白……なんでもない。

しかし。

周りの同級生たちは三文役者の芝居など見向きもしないで、俺の方を向いていた。

正確には俺の後ろの席を見ていたのだが。

認めたくなかった。しかし認めざるおえない感触が後頭部に届く。

コツンと。後ろから何か固い物で頭を叩かれた。

それが鞘で、持ち主が誰なのかを理解したとき、俺は覚悟した。

色々と。

俺の教室での席は窓側の前から4列目。後ろの席に座っているのは俺のよく知る理知的な友人だ。クラスの代表も務めている、静かで冷たい視線が少しキツイときもあるが普通の女の子のはずだ。

こんなに背が高く、俺を見下ろせる身長じゃ決してないんだ。

コロコロと表情を変化させる奴でもないんだ！

見た瞬間は今の季節と同じ空気を感じさせてくれた。春の日差しのように周囲を暖かくさせることのできる笑顔だ。そんな暖かい表情を。目が合つて一秒も経たないうちに、辺りに寒冷の気塊をとりまくように寒々とした笑顔に変える。

俺の友人は決してこんな風に季節を逆走させることのできる奴じゃない！

「それでは都喜教諭。この生徒は預かっていきます」

そう言っただけで何故か楽しそうな声の主。ひとつ年上にして俺の保護者を自称してはばからない女。陽元美刃は、席を立つ。

そして。俺の制服の襟を片手で持って、窓の外に放り投げた。ちなにみにこの教室は六階だったりする。

外から見た教室が、一枚の絵画のように映る距離まで投げられた。絵画のモデルである同級生達からの視線は多種多様だ。怯えだつたり羨望だつたり。曖昧な感情が見て取れる。

そんな中。友人たちからの視線はいつも通り、変わらないものだった。

美刃の後ろに立っている眼鏡の女の子の視線は「またですか」とでも言いたげで冷たい。

前の席の奴は右手の親指を立てて、「死ぬなよ!」と無言の激励をしてくれていた。同情か憐憫かは判別がつかない。

廊下側の席には子供のように片手を振る奴が一人。「さようなら」とも言いたげな、縁起でもない瞳が向けられていた。

そして。美刃が座っていた席の隣には美刃から預かっと思われ、鞞に収められた真剣を手にして、必死に笑いを押し殺そうとしている一人の女の姿があった。

美刃の妹、美瀬である。姉と自分を楽しませるためなら何でもする危険人物。

笑いながら俺の方を一瞥したそいつの瞳には、喜々とした輝きを感じ取れた。こうなることを見越して俺に薬を盛つたのだから。

ああ、そうだったな。お前の仕事だったな。確かにお前が俺に昼飯を恵んでくれるなんておかしいとは思っていたんだ。

思っただけでいたんだよ……………。

「覚えてろよ!」

一瞬の浮遊感。それも束の間。

捨て台詞で美瀬に復讐を誓ったときには。

もう五階の教室が見えていた。



その緑は輝かない

落ちていく。

真つ逆さまに。

頭から。

落ちながら見上げる空は青く、散在して佇む雲は白い。

そんな空に黒点が生まれた。

逆光で瞬時には判別できなかったが予想はついた。

地面に落ちると分かっていく紙飛行機を空に飛ばすように、俺を窓から投げ飛ばした殺人（予定）犯が。

後追い心中するかのように。

躊躇なく飛び降りていたのだ。

降ってくる美刃を見ながら考える。

俺はこれから未来を掴まなければならぬ。

地面に辿り着く、約二秒先でも。

生きる未来を、掴まなければならぬのだ。

私立幹能見学園高等部。

俺、白片凍津弥はここに通う一年生だ。

……俺は昼食を食べてからの記憶がない。俺が昼食後からの記憶がない理由。それは薬を盛られていたからなのだが、それを知る者は俺と薬を盛った本人だけだろう。それに俺と一緒に落ちてくる女は過程よりも結果を重視する方が多い。つまり何が理由であれ俺が授業中に寝てしまったことは事実であり、それ自体を看過されることはないということだ。そして自分の楽しみをわざわざ潰すような真似はしない女でもある。

今の状況をと思いつくのかかった時間は約一秒だ。

地面にぶつかるまではもう一秒強ほど余裕がある。

真上から注がれるじつとりとした視線が怖い。何で落ちながらそんな笑顔になれるんだ。怖いので目を瞑ろう。そうだ。落ちている間は暇なのだ。せつかくだから陽元美刃ようもとみはについて思い返して見ようと思う。

俺は瞑った瞼の内側で。一緒に墮ちている女のことを思い浮かべた。

陽元美刃。多くの学生を集めるこの学園において、多くの視線を集める容姿であることは否定しない。二年生にして既に大人びた容姿。抜身の刀のように触れがたい存在感はどこにいても目立つし、着飾った丁寧な姿勢を土台にして、大勢の前でも物怖じしない性格でもある。剣道の實力は齡十五にして学生の間では既に並ぶものなき實力者でもあった。才色兼備、文武両道と言えば分かりやすいが、それだけで彼女のことを説明できるとは思えない。生徒の多くが慕う人格者を演じられる人格を持ち、剣道の指導者としても部員から多くの支持を集めている。単純に「変」と言うのが彼女を表現するのには適切な言葉だ。

ここまでの俺の追想にかかった時間は約一秒。

明らかに現実とは流れる時間の速さが異なっている。

もしかしたらこれが走馬灯というやつなのかもしれない。

いや、それにしても短すぎるか。大分大雑把だし。短く区切られてるし。

けれど。もしこれが本当に走馬灯なら俺は生き方を反省しなければならぬ。

最近しょっちゅう出会うんだ、走馬灯。

一日に一回以上は見てる気がする。

段々と地面に近づいていく。  
もうそろそろ振り返る余裕も無くなる。

俺の好きな色の一つである緑色の景色は、何時だって俺の心を鎮めてくれる。

出来れば俺と一緒に落ちてくる女の心も鎮めて欲しいんだけど……  
つと！

芝の地面と三十センチ程で衝突、というところで俺は右手を握って開く動作を二回繰り返す。

落下ってというのは慣れればどうということはない。バンジージャンプだって何千回もやれば恐怖なんてなくなるだろう。紐がない状態で繰り返し返したとしてもそれは同じだ。

慣れるまで身体が持てば、の話だけど。慣れていても空中で綺麗に回って華麗に着地、とはいかなかった。俺は右手で芝の地面を叩きつけることで衝撃を殺し、転がるように地面を回った。

危ない危ない。変な姿勢で足から落ちてたら骨折するところだった。

「相変わらず器用なものだ……な！」

その俺の真横に。まるで体操競技の決め技のように華麗に四回転して着地する美刃。まるで何かをやりきったかのような満足気な笑顔だった。

器用なのはどっちだ。というか相変わらずの化け物だ。さすが人外の血が流れていると自称しただけのことはある。母親は悪魔、らしい。出会ったことはないし、もう死んだらしいのだけれど。

というかそんなことはどうでもいい。スカートで宙返りとか止める。せめてスパッツか何か履けよ。

「それにしても緑が似合わない女だな。お前は」  
緑色の下着が一瞬見えた。

似合わないにも程があるのでついつい凝視してしまった。……決して綺麗な足を見ずにいられなかったわけじゃない。

その短いスカートを左手で軽く持ち上げ、男を魅了するためにあるような唇に細く綺麗な右手の指先を当てて。俺の方を見ながら妖艶に微笑む美刃はまさに魔性の女だった。

「ふむ。やはりな。私もそうではないかと思っていた。やはり人の好みに合わせるよりも、私の好きなものを好きになってもらうほうが良いな」

こっち見んな。綺麗すぎて怖いんだよ、お前は。

「そうだな。うん。（よくわからんが）それが良い。じゃあ、そういうことで」

そのまま帰路に着こうとした。

今なら誤魔化せる。そう思っていたわけではない。可能性は限りなく零だった。だが千分の一%程の確率はあったと思うのだ。

ほんの僅かな可能性でも賭けたくなくなってしまう。この場から逃げ出せるという可能性があるのなら。

けれど。やはり分の悪すぎる賭けだったようで。逃げ出そうとした俺に美刃は音も無く近付いてきた。そして片手で襟を掴まれ思いつきり倒された。制服が伸びる、というかちぎれそうな勢이었다。「待て。私が好きな色は黒色だ。そして話はこれからだ。私の話の最中、襲いたくなるような顔で眠っていたのだ。これから楽しい個人授業、もとい調教、もといお仕置きの時間だろう？」

「ひっ」って一言は、怯えているのを表すのにぴったりの言葉だと思うんだ。「く」を付け加えてしゃっくりと間違えなければ。がっしりと制服の襟を掴まれて。

芝目の向きを変えてしまうようにずると引き摺られて。

俺は拷問所と言う名の剣道場（逆か？）に連れて行かれた。

気が付けば辺は暗くなっていた。空にはもうちょっと自己主張したほうがいいんじゃないかっていうくらい侘しい星の群れ。本当な



らあの群れはここから見える空を埋め尽くすほどに輝いているはず  
なんだけど、俺がこの星の上から見える輝きは限られている。

……いや、寂しい星空を一人眺めている場合じゃない。

俺には急いで行かなきゃなら場所があるんだ。こんな訳のわから  
ないことを考えている場合じゃない。

けれどその前に礼を言っておかなければならない。

俺の代わりにその身を散らしていった戦友たちに。

剣道場にはまだ明かりがついている。大勢の剣道部員達が汗を流  
しているのだらう。

「さらば戦友。俺を守ってくれた君たちのことは忘れないよ」

俺は真中から折れた木刀をゴミ箱に捨てて数秒黙祷した。陽元美  
刃の凶刃から俺を守るために犠牲になった木刀は三本。その内二本  
は真中からポッキリと折れてしまっている。彼らの最後の断末魔は  
聞くに耐えない重苦しい声だった。ポキッ、っていう声だった。

「さて、帰るか」

誰にかけたわけでもない言葉を一人ごとのように放ち。

俺は家に帰る道ではなく、異世界へと帰る道へと向かう。

俺が通う学園は公園の中にある。

この公園の中にある少し異質な場所。そこはいつ来ても時が止ま  
ったような場所。一本の樹が明らかに異質な存在感を放っている場  
所。

俺はその樹に近付いて

「遅い！ 今まで何してたのよ！」

「え？」

頭上から響いてきた声が纏った蒼い衝撃に揺らされて。

俺は意識を失った。

## その家族の輝きは

灯銘器。<sup>ディーバ</sup>

この世界、リベラリーゼで生まれた人ならば誰もが持つ無形の臓器、輝く器。

それは大きく四つの輝きに分けられる。

実体であり質量を持つ光と例えられる紅色輝術。<sup>ウエルアーツ</sup>

流体であり自由にその形を作り替えることのできる蒼色輝術。<sup>クリアアーツ</sup>

気体であり密度を操る術である翠色輝術。<sup>ファンアーツ</sup>

光体であり物質を操作することのできる黄色輝術。<sup>バストアーツ</sup>

人は輝色<sup>レディアンズ</sup>と言う名の、何れか一色の輝きを与えられこの世に生を受ける。

人と同じ世界に生きる神々。輝きそのものである四輝の女神。彼女たちに類する輝きの色を。

紅の光源、リーシャ・ベルジユ。

蒼の根源、ティノア・クラリシア。

翠の始源、ジェイリー・ランリーフ。

黄の基源、サンデイ・スプラウト。

人々は彼女たちから与えられた輝きを神の愛だと信じ、聖寵な光りとして敬っている。

一等級から十等級という、輝きの度合いを比べられることはあっても。

全く輝けない人間は存在しない。

また同時に、複数の輝きを扱える人間も存在しない。人の身で扱

える輝きはただ一つの輝色レティアンスのみである。これは才能でも努力でも覆ることではない。それは運命よりも束縛され、天命よりも覆ることのない絶対の真理である。

故にこの理より外れる者あればそれはこの世界に生きる者に非ず。輪廻繰り返すこの世界の外側より来りし者である。終焉を迎えることなき世界の輪を断ち切るために生まれた神の子。神と同等の、同類である輝きを放つ。

『輝き』そのものである。

(イツヤ！)

「っ！」

自分の内側から響いた声に呼ばれ夢から覚める。懐かしいが嫌な夢だったなと思う暇もなく。夢の続きのような光景が広がる。

迫るモノは間違いなく夢の続きだった。水に蒼色を這わせる事で思うままに弄って作った細長い刃に切っ先が、かするように目の前を通り過ぎようとしていた。薙ぐように振るわれたその刃を、水が張られた地面を蹴って右側に躲す。

人の身体を裂ける力を持った蒼い刃は最初から持ち主の手にはなく。水満ちた床に落ちて、刺さらず溶けていく。

海に砂糖の塊を落としたように抵抗なく。

「動かないですよ！ 危ないでしょ！」

響いた声も夢で聞いた物と同じ声。透明感を持って響きわたる声は、彼女が持つ存在感と同じような色。

心配そうに俺を見つめる表情は死んだ両親を思い出させてくれる。

ティノア・クラリシア。

クラリシア

蒼樹の管理者にして、今俺が居る地球とは異なる世界と同じ時を生きてきた少女。サファイアで織り上げたようなワンピースが彼女

を蒼い光そのものに見せる。

目の内とその体に、死人のような冷たさを宿している。  
冷たくても暖かい俺の家族。

「危ないじゃねえよ！ 動いて躲さなきゃ、着られてただろうが！」  
気を失って無抵抗な自分に向けられた凶器は俺の身体にこそ当た  
らなかったものの、俺の恐怖心を思いつきり掘り起こした。

「刺さらないようにしたもん！ 額の表面に掠って、血が沢山吹き  
出るぐらいにしたもん！」

そんな俺の怒りに対してティノアは子供が駄々をこねるような口  
ぶりで応じた。というか「もん」って。見た目に反せず子供っぽい  
語尾が似合う奴だ。

「いや、狙うならちゃんと狙えよ。死ぬのは嫌だけど。何でわざわざ  
額を狙うんだ？」

「え？ だって額って怪我の割に血がたくさん出るんでしょ？」  
ティノアの惚けた顔はとても愛くるしい。

……訂正。取消。俺はそんなことを思っちゃいない。放言ですら  
ない失言だ。

改めまして。  
怪我をするのは許容できる。訓練という名目でしかないこの争い  
も、賭けているものがある以上俺は真面目にやっている。

真面目にやっているのは俺の方だけなのだけど。ティノアが本気  
になれば今の俺なんて秒殺だろう。それなのに。俺は手加減されて  
いることに怒りを感じていた。そしてわざわざ血を多く出させよう  
とするティノアの行動に嫌な記憶が蘇った。

「お前……また……」

ティノアの家族になった幼い頃、怪我をして膝を擦りむいて血を  
流した。その時に俺の血を舐めて以来、何故かティノアは俺の血を  
飲みたがる。

別にこいつが血を飲んでも元の姿を取り戻したり、大きくなった

りするわけでもない。別段吸血鬼と呼ばれる類の生き物でもないし。ただの樹に宿る幽霊のようなものだ。

「べ、別にイツヤの血が飲みたくなつたわけじゃないもん！　ただ少し喉が乾いただけよ！」

喉が乾いたなら足元に水が沢山あるだろうが。

俺たちが今戦っている広大な室内には透明な水が満ちている。赤い色素を混ぜれば赤色に。緑の色素を混ぜれば緑色に。なにものにも染まりそうな優柔不断な水の色。そんな液体が室内に満ちていた。

「お前、俺の血なんて飲んでたらいつか腹壊すぞ」

「大丈夫よ。イツヤの血ならきつと飲み干せるわ」

俺の親切心からの進言は明後日の方向に返された。

……飲み干すつて、俺を干物にする気が。俺の血はセルフサービスのドリンクバーじゃねえんだぞ。

「前から聞きたかつたんだが、お前は俺のことを何だと思ってるんだ？」

いずれ聞かなければならないことだと思っていた。俺はティノアの事を大事な家族だと思っている。彼女が俺の傍に居てくれたおかげで独りだった俺はどれだけ救われたことが分からない。

けれどティノアの答えは俺が予想していたのとは明後日どころか一昨日の方向だった。

「餌……じゃない奴隷？」

左手の人差し指でこめかみを突いて悩む素振りを見せながらも即答するティノア。

「おい。ちよつと待て」

俺の当然の訴えも聞く耳持たない様子でティノアは言葉を続ける。

「じゃなくて……家畜？」

訂正は早かった。より悪くなつたけれど。

……こいつの中で奴隷と家畜どちらの方が上等なのだろうか？

……いやいや、そんなことはどうでもいい。

空いた口が塞がらないという気持ちを初めて知った。さっきの前へのイメージは訂正しよう。お前なんかこれから「幼児体型の蒼い木」の一言で説明してやる。

「ううん。でも何か違うような気がするわ。もっと、何かぴったりの……」

首を傾けすぎて、身体が時計の針のように回転を始めたティノア。頭が真下になった時でも、長いスカートは彼女と同じように重力に縛られていない。……残念なんて思っていない。

一回、二回と回転を繰り返し、時計の短針で例えるなら約一日と四分の一分の時を刻んだティノアは何かを閃いたように俺を指さして言った。

「そう！ よく水面を動く玩具おもちゃ！」

よし。よくわかった。

俺は喧嘩を売られているんだな。

「え？ なんでそんな怖い顔するの？」

またも傾いたティノアの身体が、更に傾き十二時の位置を指して止まる。

再開だ。

俺の右手首に巻かれた樹枝の束。

一見すれば無骨な腕輪で。

しかしよく見れば微細な光彩を放ち、光を蓄えているのがわかる。俺の感情にそってくれたように強い光を放ち、数本の枝が腕輪から離れ互いに絡まる。

束ね、結ばれ、出来上がったのは木の刀。

俺の手に馴染み、離れることのない木刀は次第に白い光を宿していく。それをしっかりと利き手で握り直す。全てが白い光に染まり、溢れ出した光が足元にあった水を蒸発させるように消していく。

その光を消すように。白い画板に色を塗るように。

腕輪から生まれた翠光を木刀に込める。

白い布に滲んでいくように。翠色が木刀を埋め尽くす。

足下から無くなった部分の水を埋めるように軽い波が起きる。同時に木刀から漏れでた翠光が水面全体を波立たせる。

「借りるぞジエイリー。あの蒼色を掻き混ぜてやる」

今は遠くにいる家族を思い出して。

見えない水面に浮かぶ少女に挑む。

逆巻く風を内に。

蒼を吹き飛ばす翠の輝色を刀に込めて。

その輝きに溺れたい

「そこまで！！」

聞きなれた声が聞こえたような気がした。

勘違いだったかもしれない。

直後。

巨大な俺の目前に壁として盾として作り出されていた氷の塊にヒビが入る。

同時に俺の手元から放たれた翠色の掘削機の回転音が止み、蒼い大塊が鏡のように砕け散る。

砕けた氷の欠片がぶつかり合って響く幻想的な音。

それに耳を傾ける暇も無く、肌に触れる感触に身が凍った。

俺の首元に添えられたのは水を圧縮して作り上げられた、蛇のようにのたうち回って俺の首元に巻きついてくる刃。加えて鋭い蒼の槍頭が俺の額に軽く触れる。どちらもティノアの手から離れて勝手に動いている。

槍の先端によって皮膚の薄皮が破れ、流れてくる血が目に入ってきた。

対して俺が握る得物はティノアの首元から若干遠い。もう数十センチという距離だが、これを埋めるためにはどれだけの年月がかかるか見当もつかない。

俺が右手で握っている木刀からは完全に翠の色が失われ、白い光と共に砕けて消えた。白い光の粒子は俺の右手に集って、元の腕輪に戻る。

水が張られた地面から約二十メートル程の高さで、蒼と翠ティノア（自分が切り結んでいた数百合の時間。全てが鮮明に思い出せる。

心が踊りだすような戦慄と同時に。堪らない快感が身体を支配し



ていた。

今までで一番の充足感を心で感じながら。

伴わない現実が目のある。

充実した内容に関わらず、勝敗を示す結果はやはり悔しい。

「また負けか……」

氷にヒビが入るような破裂音。

同時に蒼色の槍頭が弾け、接していた俺の身体は衝撃によって垂直に地面に叩きつけられそうになった。

けれど床に貼られた水が、水とは思えない柔らかさを持って俺の身体を受け止めてくれる。

おかげで背中を強打せずに済んだ。

人肌に暖かい水を手で掬って心の中で感謝しながら。

これがティノアの温かさなんだよな、と何故か嬉しくなる自分の心がよくわからない。

敗北したばかりで悔しいはずなのに。

見上げると蒼の充足に比べてと翠は弾けるように儚く消えていく。互いを侵そうとしていた色の残滓が音も無く弾け、粒子となって視界に溶ける。

蒼の方が勝者だと告げる空色の燐光が広がるのに比例して、ティノアの顔が喜色に染まっていく。

「いつひっひ」などと幼い外見に似合わない声を出すティノア。

「わたしの勝ちよね？ 約束通り何でもしていいのよね？」と言いつつながらアイススケートの選手のように宙でくると回るティノアは、新しい玩具を与えられてはしゃぐ子供のようだった。

俺とティノアは訓練と言う名目ですつと賭けを続けている。

俺が賭け続けているのは、この蒼の種都クラリシアから出て、一人で旅をさせて欲しいということ。

それに対してティノアは憤慨と言えるほど反発してきた。

紆余曲折。

かろうじてティノアの怒りを沈めることができた後。ゆっくりと理由を話した。

俺が度に出るのは俺の中に居る存在を還すため。

俺が初めてそれを話したとき、この種都の草原に直径二百メートル程の大きなクレーターが十数個生まれた。

そのクレーターはティノアと俺が作り出してしまったものだ。

俺はその時だけ本気の神様ティノアと引き分けた。

その後ティノアは「私が誇れるほど強くなれたなら、旅に出るのを許してあげる」と言ってくれた。

この世界、リベラリーゼは色鬨トーンと言う名の壁で区切られている。

実体を持ったオーロラのような光のカーテンが自然的国境を形成しているのだ。

国境というよりは世界の壁というべきかもしれない。

人の身では超えられない光の壁。

そんな壁によって大きく五つに分けられる色鬨はそれぞれが独自の文化を築き、進歩を続けてきた。

その色鬨が数年に一度無くなり、人が自由に世界を動き回れる期間がある。と言われている。

その期間を見計らって俺は世界を旅したいのだ。

俺の中、正確には右手首に宿る奴のために。

しかしこの世界は俺みたいなお子供が一人で闊歩できるようには出ない。  
来ていない。

彩獣ティアイと呼ばれる危険な生き物が徘徊するこの世界は、人に優しくない。

この世界について無知な自分が一人で旅をするなんて無謀だと、ティノアはいつも言う。

つまりこの戦いは俺がティノアの元から巣立てるかどうかの試験であり、今回の結果は不合格ということになる。

今回も、と言った方が正しいのかもしれない。認めたくないけど。対してティノアの賭けるものはいつだって具体性がない。

今回は「わたしの言うことをひとつだけ聞きなさい！」と言われた。

勝った後に何をするか決めるなど賭けになっただけはないと思う。

勝つことが前提な物言いもどうかと思うけど。

けれどティノアの賭けるものに「何かを言ったり、訂正を求めたりはしない。」

言っただとしても、自分とティノアの埋められない価値観の違いを、改めて感じさせられるだけだ。

「奴隷にでも家畜扱いでも好きにしたらいいさ」

今まで全戦全敗だけれどそういうことをされたことはなかったな、と思いつつ大きく息を吐いて力を抜く。

「じゃあ、わたしが良いって言っただけで動かないでね」

それだけ？　と思った三秒前の俺に忠告したい。

既に動けなくなっていることに気づけと。

上から来るぞ！　気をつける！　と。

冷たい目が初めて出会った時のことを思い出させた。

徐々に近づいて来るティノアに今までにない恐怖を感じる。猛獣の檻に放り込まれた餌の気分と言うよりは、身一つで大海に放り投げられた気分と言えるでしょうもない恐怖。もちろん見える範囲には島もなければ船も見えない。一瞬木の板が見えたような気はしたが蒼色がその視界を遮るように染め上げた。

見えるのは、ゆっくりと下降してくる一人の少女だけ。

離れて見ると燐光を発していてよく見えないが、ティノアの白い肌は彼女の蒼色の目と髪をより素晴らしいものに際立たせている。

少女と言うより妙齡の美女と行ってよい雰囲気を感じさせる妖艶な笑み。それが紅い家族を思い出させて、凍らされていた思考が戻った。

「て、ティノア？ どうしたんだ？ 何か怖いぞ？」

唇が震え、上半身を起こして座っていた身体が本能に従って後退さるうとする。もう無意識の行為だ。動くな、と言われたことなど気にしてはいられない。

「動かないで」

もう一度。静かに、それでいて抵抗を許さない声が広い室内に木霊する。

後ろに下がろうと動かした腕が水に掴まれる。この室内はティノアの体の中のようなものだ。輝色を這わせなくても、その中に満ちた水を操ることは容易い。

身体が密着するほど近づき、白く小さな指先が俺の頬に触れる。冷たい指撫でられる感触に身が怯み、目を瞑ってしまう。

「んっ……」

微かな艶かしい声が目前で響き、冷たいモノが俺の額をなぞる。

それがティノアの舌で、俺の血を舐めとっているのだと経験からわかった。

慣れた行為なのでそれ自体に抵抗はない。

「ごっほん！！」

ん？何の音だ？

誰かの声が聞こえたような気がして目を開ける。そう言えば、さっきの声は……。

「うわっ」

思考が中断される行為の変化。

開けた目の中、血が入った目頭にティノアの舌が伸びてきて執拗に舐めとっていく。

「お、い！ ティノア！ なにすんだ……」

舐められた左目は痛みこそなく、目薬を挿したような清涼感に包まれている。

だからこそ冷静に。

一度顔を背けてティノアを見直す。

夜空に輝く孤独な月を連想させていた肌は僅かに朱色に染まっていた。焦点の定まらない瑠璃色の瞳が濁った水たまりのような虚ろなモノに変わっていく。

俺を見ていないような気さえする。

こんなにも近くにいるのに。

「……イツヤ」

「なんだよ」

余りにも怖くて反射的に出た声は、震えていたのが自分でもよくわかるほどだった。

いつの間にか手を縛る水の感触が消えていた。

「動くな」と言われたことも忘れ、座ったまま手を使って下がろうとする。

けれど手が水を切る寂しい音がするだけで身体が後ろに下がらない。

後ろを見ると水で出来た壁があって、弾力のある表面が下がるうとする俺の身体を止めていた。

「イツヤ……イツヤあ……」

怖い！ 怖い！

俺の首筋がねっとりひんやりと舐められるた！

次いでねっとりとした指使いで俺の全身はくまなく撫で回された

！

俺の耳元を舐めたり耳に息を吹きかけてきたりを当たり前のようにな度も繰り返される！ 吹きかかる空気中の水分さえも凍らせられるような冷たい吐息は何時かの氷結地獄を思い出させた！

もう、なんというかティノアの全てが怖い！

「大丈夫よ……すぐに何も考えられなくてあげるから……」

ティノアに似合わない声に正直俺は参ってしまった。

本能のままにティノアと望むことをして彼女に溺れしまいたい。

そして薄いピンク色の唇がゆっくりと近くなって。  
ゆっくりと瞳がのぞき込まれて。

俺の視界がティノアで埋まる。  
もう、蒼しか、みえない。

## それは世界を繋ぐもの

「クラリシア様。お戯れはその位にしておいた方がよろしいですよ」  
「おわっ!」

渋い声が響き、俺の背もたれになっていた水の壁が崩れた。  
ぱしゃ、という音と共に俺の身体が水面に浸かる。

ぶくぶくと、水中で空気を吐き出す音が鳴る。

ただこの水に浸かっても呼吸ができなくなったりはしない。

「ぶくぶく」

敢えてもう一度水に浸かって息を吐いてみた。

足湯程度の温かさが気持ちいい。水面に身を任せているので全身浴になってるけど。

「邪魔しないでよサイバル! 人間たちがこういうことするときは見てもぬ振りをするのが常識じゃあないの!？」

「……本当に何をされようと……あ、いえ、仰らなくて結構ですよ。聞きたくありませんので」

いつの間にか抱き合うような体制になっていた俺たち。そのすぐそばで跪いている人がいた。

俺に馬乗りになっていたティノアは、その人物に食ってかかるように詰め寄っていた。

長いローブに身を包んだ男性はサイバル・ロツシ。蒼の種都を治めている教会の教区長という役職に就いている人。人嫌いなティノアに物怖じしない、というだけでも恐ろしい人物ではある。

ティノアに殺されようとしていた俺を助けてくれた人でもある。額を片膝に付け、跪いた姿で目を合わせないように。我俣な主をなだめる我慢強い執事のような言い方で話し続けていた。

サイバルさんがそんな姿勢で話しているのにはいくつか理由がある。リベラリーゼ、特に蒼鬨クリア・トーンには全ての都市を川が繋いでいる。ナイル川のように幅広い川がそれこそJRの上下線のように。交易には欠かせない物となっている航路。

それを管理しているのがティノアなのだ。人には手の届かない自然の管理を行う輝く神様。そんな存在を崇めている組織が教会、正確には教樹会エクセプという。崇め奉る存在の目前に居るのだから当然と言えば当然の態度なのかもしれないが、俺みたいな一介の日本人からしてみればよく分からない感覚だ。

もう一つ理由があった。

こいつには光色輝術以外にもいくつかの能力がある。その内の一つが水を「服従」させることである。

それはリベラリーゼに流れる水も、人間に流れる水分も例外ではない。ティノアに近づいた生物は否応なしに、飽く迄も自然に屈服する。地に這い蹲るものも居れば、何かしらの耐性を持って跪ける人も居る。跪けるだけでも少数派なのだが。

俺はティノアと同等の存在に根付かれていますのでその能力が効かない、というか届かない。

「イツヤ君。君も気を抜いている場合じゃありませんよ。訓練をするときは必ず私を立会人として呼んでおくこと、と言っておいたでしょう？ わたしが偶然ここに来なければ、その綺麗な顔に穴が空いているところでしたよ」

動かないはずの身体をゆっくりと動かして。俺の方を見てくるサイバルさんの瞳からは感情が読めなかった。

「もう！ 私のイツヤを変な目で見ないの！ 許すからさっさと立ちなさい！」

ティノアの許しを得て立ち上がったサイバルさんから、真っ直ぐ向けられた視線。それは少し厳しく感じられた。俺はそれに対して



「ああ、はい」と謝ることしかできなかった。「何言っただあんだ」と言いたい気持ちがあったのだが。

「しかし、この惨状を見せられれば呼ばれなくて助かった、と言えなくもないですが」

サイバルさんが悲しげな顔で室内を見渡したので釣られるように周囲を見渡した。

「うわ」と思わず出た声は、これを自分達がやったことと認めたくないほど酷い有様だったからだ。

爆心地、という表現がぴったりの光景。太く鋭い爪で抉られた、と感じさせる断面の破片が水面を揺蕩っている。

時代を感じさせる優美な装飾に覆われていた内壁は、細い線のような跡で幾重にも傷つけられていた。多分稲妻に似た発光現象が原因で傷付いてしまったものだろう。あの術は改良の余地ありだ。テ―ゼと話して詰めておくとしよう。

見上げても遠すぎではつきりとは識別できないが、天井には渦を巻くような紋様が刻まれている。あれは元々あったものではなく、最後の術が逸れて出来てしまったものだ。本当はこの樹の雄大さを余すことなく伝える壁画が描かれていたのだが、見る影もない。というかあんな所まで飛んでいったのか。やっぱり俺だけで制御できない輝術は駄目だな。もっと練習しないと。

床には傷が付いていない。ように見えて実際は大きな穴がいくつも空いていて、真つ黒な部屋の外側が見えている。遺産とも呼べる貴重な造形物を、ここまで見るも無残にしてしまったことに少なからず心が傷んだ。

例えすぐに直るのだとしても。半分以上は部屋の主であるティノアのせいだとしても。

この部屋は陽光の届かない深度の水中。水中にある広大な地下室。それが蒼の聖域と呼ばれている、クラリシアの核が座している場所だ。

俺とティノアが賭け試合をするときはいつもここでしている。こんな惨状を街中で引き起こしたら大災害ものだからな。

そんな災害をもつともしない水柱が輝きを取り戻していく。先程までは只の黒い柱だったのだが、ティノアが戦闘をやめたことで機能を復活させたようだ。

室内の中心にはティノアと同じ蒼色の光を持つ水天柱リチュアルと呼ばれるこの樹の大黒柱が伸びている。その柱に巻き付くように伸びている螺旋階段にだけは傷一つない。

世界を結ぶ柱である水天柱は光色輝術リペルアーツでは傷を付けられないのだ。

「まあ、彼がここまで成長してくれたことを喜ぶべきでしょうか」「俺のことなのにティノアを見て告げられた言葉に、あまりいい気はしなかった。

「当然よ！ イツヤはわたしが育てたんだから！」

「出会い頭でイツヤ君に大怪我を負わせたのでは飽き足らず、殺害しようとした方が言う台詞ですか？」

教会に所属する身であれば。いや、この大地で暮らす者であれば誰もが信仰の対象とするティノアに、こんな風に口が聞けるのは俺の知る限りサイバルさんしかない。

……というか死にたいんだろうか？ サイバルさんが言ったとおり、俺は初めて会ったときに問答無用で殺されかけたのに。それにサイバルさん自身も何度も殺されそうだったのに。

「あれは、少し気が立っていただけなの！ 今はわたしの家族なんだから、わたしの大事な人なの！」

俺のトラウマは、加害者の気が立っていたからと判明した。ついいらいらしてやった、ということだろうか。

「クラリシア様がイツヤ君の家族ということを否定はしませんが……」

「違うわよ！ イツヤがわたしの家族なの！」

何が違うんだよ、というつつこみはさておき。一時間から二時間ほど動き回っていたので結構疲れた。

「 回家に帰るつが。 向こつはもつ良い時間のはずだ。」

それは飽くまで蒼い輝き

「じゃあお二人とも。俺は家に帰るのでごゆっくり」

言い争う二人に手を挙げてさよならの合図。  
この部屋の中心に足を向ける。

「イツヤ！ ちょっと待ちなさい！」

「ぐりゅうえつぷ」なんて普通に生活しているなら絶対に出ない声  
が俺の口から出た。

首を弾力のある水の輪で締められたせいだ。

ティノアの手には青い紐の束と見間違えるような質量を持った輝  
き。輝きを束ねて縄のようにくくり、輪を作って輪投げのように投  
げたのだろう。

俺の首に向かって。

言うことを聞かない犬の首輪を引っ張るような、躰に似た所作。  
やっぱりティノアにとって俺はペット扱いなのだろうか？

「な、何すんだよ」

ティノアに呼び止められて振り向くと、いきなり抱きしめられた。

「服、すごいことになってるからここで脱いでいきなさい」

ティノアがいきなり俺の服を脱がせようとする。破けた服の肩口  
から血が滲んでいるのが見えて、また舐められた。

改めて、というか今まで気付かなかったのが不思議なくらい俺

の服はボロボロだった。

薄い巡礼服の上に着ていた分厚いコートには虫食いのような穴が所々空いていて、右腕の袖は腕の関節から先が無く肌と腕輪が露になっていた。恐らく自分でやってしまったことなのだろうが。

「普通の服だったらそうなっちゃうのは当然なんだから、わたしのあげた服を着なさいって言うてるでしょう？」

服って……あれは……。

「ティノア。男は、ああいうヒラヒラした服は着ないんだ。何度も説明しただろう？」

ティノアが言っている服というのは自身が着ているのと同じ、白と青のワンピース。当然の如く女ものだ。一目見ただけで金がかかっているなと思わせる複雑な装飾は、明らかに戦うのには向いておらず、普通に歩くだけでも鬱陶しそうなことこのうえない。あんな服を、幼い頃の自分が着せられていたことを考えると、寒気どころか吐き気がする。

そうはいつてもティノアのような（外面だけの）美少女にはよく似合っている。優美でありながら清楚に感じる色合いは着る人の印象を（乱暴な内面とは違う）色合いと同じ物に変えている。

「じゃあイツヤはどんな服が着たいの？」

着たい服？

今着ていたのは教会から貰った黒い巡礼用の服だ。旅する者のために作られた服は見た目は質素ではあるが丈夫で軽い。全体が黒一色なので汚れも目立たず何日も着回せる便利な服だ。少し寒いので上から分厚いコートを羽織ってはいたのだがそれは既にぼろ布に変

わった。

「今着ているような軽い服がいいな。単純な色合いで、動きやすい服がいい。サイバルさんが着ているような、ごてごてした分厚い口ーブのような服は嫌いだな」

「イツヤ君これは意外と軽くて通気性も良く、様々な機能が付いていて便利な服なんですよ」

サイバルさんの顔が若干沈んでいるように見えたのは……気のせいだろう。この能面のように表情の変わらない人がそんな風に感情を表す訳がない。

ティノアがふむふむ、と何かに納得したように頷きながら、何かを考えている。その間も俺の服を脱がして、というか破りつついて上半身が裸になってしまう。

こいつは何がしたいんだ？

まあ、この樹の一階に行けば着替えが有るからいいか。

開放された後、部屋の中心にそびえ立つ水柱を中心軸に作られた螺旋階段を登る。見ているだけでも不安定と分かる、決して足場になどしたくない今にも折れそうなデザインは急ぎ足で登れば目が回ってしまいそうな程に急なのだが。慣れればどうということはないものだ。世の中慣れだけではどうしようもないものもあるが。

一階にある棚から服を取り羽織る。素肌の上にコートを羽織る妙な格好になってしまった。

下ではティノアとサイバルさんが二人で仕事の話をしている。何でも大事な話らしく長くなるのでと言われたのだが……。

まあ俺が気にしても仕方のないことだ。さっさと家に帰って寝るとしよう。

「テーゼ、起きてくれ」

自分の中にいる、正確には右手首に巻かれた腕輪に呼びかける。  
俺に巻き付く根も葉もない樹に。  
幸いなことに。今回はすぐに起きてくれた。

(……………もう朝ですか。全然寝たりません)  
「いやこつちと違って向こうはもう夜だと思っけど」

俺の頭の中に響く声はとても寝ぼけた、というか惚けた声だった。  
呆けたと言った方がわかりやすいかもしれない。

(もう帰るのですか？ ティノアとイチヤイチャしなくていいのですか？)  
「そんなことをした覚えはない。……………つてもしかしてお前起きてたんじゃないだろうな？」

寝たふりか。サボリか。  
お前が協力してくれないから今日もあっさり負けてしまったじゃないか。

(いえいえ。ずっと寝ていましたよ。イツヤがティノアの誘惑に負けて溺れそうだったことなど知りません)

……………これはテーゼの引っ掛けだ。ここで『起きてたんじゃねえか！』と突っ込めばその事実を認めることになる。ここは冷静に『そんなことするわけないだろ』と言わなければ……………いや、もう駄目か。

(まあそうやって考える時点で筒抜けですからね)

「そうだな」

俺はこいつに隠し事はできない。

考えたこと、思ったこと、全て伝わってしまう。対してテーゼが胸の内で考えていることは俺にはさっぱりわからない。

不公平だよな。

(そうですね)

寝起きの脳内会話終わり。

互いに納得して俺は右手をかざす。

蒼く光り、重力に反して上へ上へと昇り流れる水柱に。

腕輪から溢れさせた白い光を水柱に混ぜる。

くるん、と。

一瞬時が止まったかのような感覚の後には。

反転という表現がピッタリ当てはまる視界の変化。

世界が逆さまになったような錯覚を引き起こす浮遊感が生まれ、重力に従うことを覚えた下へ下へと流れる水柱に飛び込む。

白い光と一緒に。

「行ってきます」

俺は異なる世界から一步を踏み出し。  
生まれた世界に出かける。



## よくある朝の輝きで

(おはようございます)

俺の中に根付いている樹は最近益々目覚まし時計の代わりとなっ  
てきている。

(失礼な。目覚まし時計とはなんたる物言いでしょうか)

スルーだ。起きたばかりで寝ぼけてるからうまい言い訳が思いつ  
かない。

(一回目ですよ)

スルーは一日三回まで。テーゼとの約束その一。

こいつに起こされると現実が夢のように感じる。

起床時のみ発生する灰色の靄がかかった視界の向こうで。  
凍えるような寒さの部屋に、春の暖かい日差しが差し込む。

……？ ああ、そうか俺は昨日自分の家に帰ったんだ。

目覚めてすぐ。自分自身が抱いた訳の分からない感想を疑問に思  
った朝。

現実と夢の狭間である微睡みの時間を親しむように嗜んでいたと  
ある日。

冷たく柔らかい感触と、涼しげな香草に似た香りに目が覚めて。  
鈍く感じる朝の頭の回転が、とりとめもないことに対して働き始  
めた。

いつもと変わらない朝とはどういうものを言うのだろうか。

同じ時間、変わらない朝日に照らされて起きることを言うのだろうか？

それとも起きてから同じ習慣を繰り返したり、同じ出来事が起こったりすることを言うのだろうか？

……どうでも良いことに朝の貴重な時間を費やしてしまったことのために息をつきつつ。

ベットと机、一割も埋まってない本棚と、デジタル時計しかない殺風景な自分の部屋で。

知らない間に隣に眠っていた氷枕……じゃない、少女の顔を見つめた。

青い髪はそれ自体が光っているように見えて、朝の光に照らされた室内は青く見える。長い髪は風が吹いたわけでもないのにふわりと揺れる。サラサラと流れる心地の良さは、緩やかな速度の清流に手を掠らせたようで。

意味も無くその髪に触れる。

水の透明感を持った少女。今にも消えてしまいそうな儂げな女の子。

布団の中が妙に寒いと思ったらこいつのせいだったのか。互いに抱き合うような形で寝てしまっていたため接触部分である腹の辺が妙に冷たかったのだ。

「おい、ティノア。起きろ」

剥き出しの冷たい肩にふれ、軽く揺らす。相変わらず細い腕だ。真っ白な肌は血が通っていないように生気がなく、力を加えれば骨がポツキリと折れそうな程に頼りない。ただ氷のように冷たい肌はスベスベでぶにぶにで何時までも触っていたいほどに気持ちいい。無意識に絡めてしまった指先はまるで氷細工のようで。触り続けた

ら溶けてしまいそうだった。

肩を撫で、頭の後ろに手をやって本能のままに思いっきり抱きしめてしまった。

……さて、これじゃあ俺はただの変態じゃないのか？

( よつやく気づきましたか。紛うこと無き変態ですよ )

頭に直接響いてくるテーゼの声を聞き続けていると寝ぼけた頭が冴えてくる。カフェインをゆつくりと、大量に摂取した時のように。

( 興奮したのですか？ )

「怒ってるんだよ！」

誰に言われても構わないが、お前にだけは言われたくない！

「イツヤ……だめ……」

起きたのかと思ってティノアから咄嗟に離れた瞬時の拳動。それは俺の小者ぶりを如実に表していた。

( 小者というよりは小心者かと )

( 似たようなもんだろ )

何が違うんだよ。

「ズボン……より……スカート………似合う」

こいつ。また昔の夢を見てやがるな。俺にとって悪夢でしかない夢を。

「……さつさと」

脇に腕を通して無理矢理抱き起こす。小学生ぐらいの体格と重さであるティノアを持ち上げるのは簡単だった。

(あなたと比べても大差は無いのでは?)

人が気にしていることをあつさり言うな。もうすぐ伸びるんだよ。

「……ティノア！ いい加減起きろ！」

ティノアの耳元で叫ぶと大きな目が気だるそうな色を持って半開きになる。瑠璃色の光が差し込んでいるような、彼女の髪と同じ色けれど髪の方が僅かに明るい。

水色のワンピース型の服を着ているのを見てふと思ったのだが、彼女を遠くから見たら白昼であつても青い人魂が見えるかもしれない。

人魂少女ことティノア・クラリシア。

彼女の輝きは朝日よりも眩しい。

## 何時だって掴める輝きだ

「あれ……イツヤ？ ……どうして？」

「それは俺の台詞だな。お前こそどうしてこっちに来て俺の布団で寝てるんだ？」

「えっと……なんで……だっけ……？」

ティノアの目は焦点が合っていない。まあいつも通りではある。姉妹と似て、こいつも大抵寝起きが悪い。仕方がないのできちんと目が覚めるまで雑談にでも興じようか。幸い起床した時間はいつもより早かったので余裕はある。

「お前、どんな夢を見ていたんだよ」

「ゆめ？ ……そう……ざんねん。面白かったのに」

「そうかい。そりゃ残念だったな」

ったく。どんな夢を見てたんだか。いや、スカートと俺の名前と言う二つの単語が聞こえただけで大体分かるのだが。分かってはいるんだ。忘れさせたかっただけで。

「イツヤのせい」

「は？」

「イツヤが起こしたから夢の続きが見れなかった」

ティノアの目がとろんと溶けそうなほどに半分閉じていく。半分寝てるんじゃないかと思うほど。

「はいはい。そりゃ悪かったね」

「償って」

「償うって……何をだ？」

「私が見てた夢の続き」

「お前の頭で行われた幻覚体験なんてどうやって償えというんだ」

「別に難しいことじゃないわ。ただ私のあげたスカートを履いてくれれば痛い！」

ティノアを支える手を離し頭を叩く。こいつは基本浮いている。身長差はあっても頭を叩くのはこちらも立たなければならぬ。……決して俺の身長が低いわけではない。

「なんで叩くのよ！」

声色がいつも通りに戻った。

やっと起きたか。

「まだ寝ぼけているようだったからな」

「目は覚めてるのに……酷い」

目が覚めているなら尚更だ。

さてと。枕元に置いてあるデジタル時計に目を向けると余裕を持って行動するには丁度いい時間だった。

「目は覚めたか？ それじゃ下に降りるぞ」

朝練もしなければならぬし。

学園に行く準備もしなければならぬ。

「ティノア。ちゃんと足を床に付けて歩いてこいよ」

ふわふわと俺を見下ろす位置に浮かんだまま、移動しようとする  
ティノアに対して注意しておく。

こいつは放っておいたらドアやら壁やらすり抜けて行くからな。

「えー。イツヤの家の中ならいいじゃない」

子供のように、……子供の見た目に反しない仕草で文句を言うテ  
ィノア。

「えーじゃない。家の中で慣れておかないと外に出たときに飛んで  
しまうかもしれないだろ。こっちではちゃんと歩いておけ」

何で俺がこんなことを注意しなければいけないんだ。ティノアも  
いい年をした大人（見た目はともかく年齢だけは）なのだからいち  
いち言われなくても今根付く世界の常識など察して欲しいものであ  
る。

（貴方がそんなことを人に注意できる程常識的な人間だとは思いま  
せんが）

（お前こそ。人に言える程出来た人格だとは思わないけどな）  
（御尤もです）

認めるなよ。俺の憤りが行き止まりで行き場を見失ったじゃない  
か。

「えー」というティノアにもう一度「ちゃんとしなさい」と言い直  
す。

子供にいけない仕草を直すように注意する親というのはこいつ  
気分なのだろうか。

……いや違う気がする。

「もう。歩くのは嫌いなのに」

不満を隠そうともせず、小さな足が音も無く床に付く。

重力に縛られればこいつもかろうじて人間に見える。まあ新種の発光人間としてだけど。

ティノアの冷たい手を引っ張って階段を下り、リビングに向かう。

夜空に浮かぶ星や月と違って手が届く輝き。

ティノアの手はいつだって空いている。



## それは目指すべき輝きの終着点

朝日の輝きというのはとても単純だな、と最近よく考えている。

意思の無い単純な輝きは羽虫を寄せ集める街路の電灯や、手に収まる懐中電灯の光と大差がない。いくら巨大で雄大で類するものが無い輝きだ、とは思っても所詮見上げるだけの存在だ。近づきたいとは決して思わないし憧れたりもしない。そんな輝きは俺の家族のモノとは比べるべくもない。

(何が言いたいのかわからないのですが)

(家族の自慢だよ)

(……ティノアが好きなくせに我慢ばかりしているから……。ついに頭だけではなく心の中の声まで面白く……。ではなく可笑しくなつて)

(テーゼ。面白くと可笑しくを使った理由を十文字以内で説明しろ)

(貴方は滑稽です)

(黙れ)

テーゼの妄言に付き合う時間はない。

リビングに降りて学園の制服に着替え、朝食の準備をする。この家の管理者だった俺の爺さんはもういない。つまり今の俺は一人暮らし。

……ただ今、俺は二人分の朝食を準備している。

片方は無駄になるのに。

作っているのは冷蔵庫に入れておいた賞味期限も分からなくなつた食パンを軽くトーストしたもの。それにレタスにドレッシングをかけたサラダとも呼べない簡素なもの。まあなにも食べないよりはましだ。

俺の家族は基本的に食事をしない。だからいつも一緒にいる俺も食事をしないことが多々あった。

けど何時だったか。五日ほど食事をせずに倒れて以来、最低限の食事は取るようにしている。

でも俺は料理ができない。練習してもさっぱりだった。余りにも不味いその出来は、俺の友人に『冷凍食品を凍ったままかじったほうがまだマシ。凍津弥だけに』と言わしめたほどだ。

つまりは食べない方がまだいい、ということだろう。

食卓に皿を並べて先にティノアを席につかせる。

……座ったまま椅子ごと浮いているが、もう何も言うまい。これもティノアらしさだ。

「それでね、試練が終わってミネアが王都ラ・クリアに帰ってきたんだって」

玄関の鍵も開けず、二階にある俺の部屋の窓をすり抜けて入ってきました。と住居侵入の罪を自白したティノア。向かい側の席についてパンをかじる振りをしながら、犯行の動機について話し始めた。無論椅子の足は床についていない。ふわふわと水面に浮く浮き輪のように揺れる魔法の絨毯ならぬ魔法の椅子。文字通り種も仕掛けも無い椅子です。っていかどうやって浮いてるんだ？ 是非種明かしをお願いしたい。種都を明るく染める樹だけに。

「それで？」

ペットボトルに入れて持って帰ったクラリシアの水を二つのコップに移し、氷を一つずつ入れて片方をティノアに渡す。ティノアも水分は取る。最近の好物は果汁100%のりんごジュースだ。

「だからイツヤも会いに行ってあげたらどうかなって」

ふむ。ティノアにしては気が利く。

情状酌量の余地あり、と。酌量軽減で一ヶ月ほど浮遊禁止の有罪判決。執行猶予一日といったところだろうか。

「ふーん。ミネアがね……」

ミネア・ミネンス。初めて知り合ったのは確か俺が森の中に放り投げられた時だったか。

ちゃんとした名前はミューネリア・ラ・クリアという。蒼の色鬨、第一王都のお姫様だ。

懐かしい友人の顔が脳裏に浮かんでシャボン玉のように弾けて消えた。綺麗なものこそ儂いものだ。

「だから今、行く？」

……………そういうことは昨日の内に言っておいてもらいたい。そういうことならこちらに戻ったりせずつ学園なんて休んだのに。

ティノア誘っているのはリベラリーゼと呼ばれている異世界である。もう何度も行ったり来たりを繰り返しているので気後れこそしないが消極的にはなる。せっかく手間をかけて帰ってきたのだ。学生らしく学園には行かなければならない。

けれどこちらで時間を使うことに少しの焦りもある。

（私との契約を忘れてはいないようで何よりです。ですが忘れてくださっても構わないんですよ？）

テーゼの声は飽く迄も平坦でいつも通りだった。

(……忘れるわけ、ないだろ)

テーゼに習って俺も同じような声で言葉を返す。けれど俺が隠していた感情を読み取ってか取らずか。テーゼは更に言葉を続ける。

(まあ私の寿命が半分になってしまったとはいえ、あなたよりは長いのですから。瑣末な寄り道など問題ではありませんよ。貴方が死ぬ前に、しっかりと私を消してくれればいいのですよ)

(……ちゃんと消さずに還してみせるさ)

俺は決意を新たに言葉を紡いだ。

黒点に囲まれた、真っ白な始まりの輝点にテーゼを還す。

そのために。リベラリーゼに点在する姉妹にもう一度、直接会つ。

そしてリベラリーゼの最奥。もう滅んだ色闘ル・ミナスステイと呼ばれる玉石混淆とした輝きの泉。耀都と呼ばれるその都市に。

きつと。

「イツヤ？ 私の話し聞いている？」

「ん？ ああ。聞いているよ」

いけない。ちょっとテーゼに意識を向けすぎたかな。

普段は俺の感情なんて歯牙にもかけないくせに、俺がティノア自身の嫌いなものに意識を向けると何故か敏感に反応してくる。こういうところは無駄に鋭いよな、ティノアって。

「そう？ じゃあ早く着替えて行きましょう？」

「は？ 着替え？」

「うん！ これ！」

そう言ってティノアが元気よく薄い胸元から取り出したのは服で

も布ですらもなく。ただの蒼い樹の枝だった。

ティノアの白くて薄くて柔らかい胸から出てきた枝を手渡され、俺はそれをティノアと交互にずっと見つめていた。

枝はティノアの体温に冷やされていたのか結構冷たい。

(……見つめすぎです。この変態)

(……すみません)

テーゼの冷たい声に俺は反射的に謝ってしまった。

## 分譲される輝きは

「……ティノア」

「なに？ 早く着てよ。せっかく作ったんだから」

「……これを着ると？」

「うん。綺麗でしょ？」

「ああ、うん。綺麗だな……で？」

「でって……何が？」

「いや、うん、ちよっと待ってくれ」

（教えてくれテーゼ。俺はどうすればいい？）

着替え、と言われて渡された枝。俺はその枝をどう着たら良いのか分からず少し錯乱してしまった。俺の言葉では言い表せない、枝に対するティノアと俺の認識の差。その埋められない、違いすぎる常識と感覚の気持ちの悪さ。それに俺は酔ったような吐き気を感じていた。

（イツヤ。落ち着いてください。それは服と言つよりは装身具です。右手で思い切り握りつぶしてみてください）

（握りつぶす……こうか？）

ティノアの髪を束ねて結ったようにも見えるその枝を俺は強く握りつぶす。

そうすると枝が折れて砕けていく。

そして光の粒子に変わって枝の欠片が俺の服に染み込んできた。そして俺の服の繊維を駆けずり回るように蠢いた輝きたちが学園の制服におかしな模様を刻み込んだ。

「……なにこれ？」

これは……制服の改造という重罪ではないだろうか？ 俺は制服をこれ一着しか持っていない。つまり今日もこの制服を着ていかなければならない。けれどこんな所々に蒼く耀く模様が刻まれた制服で学園に出かければ美刃の制裁は免れない。

「えつとね。昨日延樹ジエルと話して作ったの。イツヤの服が自分が生み出す輝色に耐えられないからどうしたらいいかなって。そしてらイツヤが使う光色輝術リベラルアーツと同等の輝度を服自体に通せば良いって教えてくれたの。でもイツヤの使う光色輝術は私達がプレゼントしたものでしょ？ だから同じくらいの強さを持った輝度って私自身の身体しかないわけじゃない？ だから私を少し切り取ってもらったの」

……切り取った？ それってどういうことだよ……？

（イツヤに分かりやすく言うのは難しいのですが……そうですね。テイノアやわたし、リベラリーゼに植え付けられた存在である輝樹ティルは厳密に言えば肉体を持っていません。四樹折々（リベラルトーン）が世界の輝きを吸い取って生み出す幻影なのです）

（……それは知ってる。テイノアに聞いたからな。『私は生きてはいないの、生まれた時からね』って言葉と一緒に）

その言葉を聞いたとき、俺はテイノアに強い親近感を覚えた。

（おそろく、としか言えませんがテイノアは自らを、自らの肉体を織り成す輝色レティアンスの一部を刻んで貴方に与えたのでしょうか。とは言ってもあの子の身体から何かが失われたということではありませんから貴方が今胸の中で考えている人間らしい自己犠牲とは無縁のものですから安心してください）

そ、そうなのか。安心した。俺はてっきり臓器提供とかそういうイメージをしていたんだよ。

「つまり俺が思いつきり光色輝術を使ってもこれからは服が破けな  
いってことか？」

「うん。あといつもは光らないのよ？ イツヤが光色輝術を使って  
戦おうとした時だけ光るの。他にもいくつかおまけも付け足してみ  
たから今度試してみるといいわ」

「へえ〜何か魔法使いの装備品みたいだな。でもどうして今になっ  
て急にこんな物をくれたんだ？」

今までだって服が破けることは何度もあったのに。

「えっとね〜それは向こうに言ったら教えてあげるわ。だから早く  
クラリシアに行きましよう？」

「ああ。じゃあ行くか」

とティノアに流されて返事しそうになっていた自分が情けない。

俺ももう少し自分を持たないとな。

行くとすれば放課後。学園が終わってからだ。

「学園から帰ったらな」

だから無難に返事しておく。

しかしその返事はティノアにとってたいそう不満だったようで。

「……………」

ティノアが無言の笑みと共に俺の方を一睨みする。

するとティノアの手の中にあつた、コップに入っていた水が小さ  
なナイフの形となって宙を浮き、俺の首元に添えられていた。

自分の思い通りにならなかつたらと言つて、すぐに脅迫するのは  
止めてもらいたい。

これは『不確かな型』  
スティングレイ

リベラリーゼにおいて、大陸中の水を管理する蒼樹クラリシアの  
宿主であるティノアが、俺に対してよく使用する輝術だ。全ての蒼  
色輝術リアーツの原型とも言つべき術。蒼色を這わせた無機物を『何か』  
に変化させる術である。今回はコップに入っていた水しか使用して  
いないので、ナイフの大きさも食事に適した大きさでしかない。

……冷静を装ってはいるがこれが結構よく切れるので怖いのである。



額に銃口を押し付けられるよりも遙かに怖い。なぜならこの真剣よりもよく切れる水の刃の味わいは、俺の体が身を持って経験しているからである。

今のティノアは凄みを持った悪魔のような笑顔。背後には鬼が見えそうな迫力だ。まさに悪鬼幼女と呼ぶに相応しい形相になったティノアがゆっくりと口を動かす。

「も・う・い・ち・ど・言わせるの？」  
いつも通りの怖さだ。

……というか何を怒っているんだろうか？ 別にティノアの話をしていざしるにしているわけではない。ただ今日は遅くなると言っただけだ。

それで怒るとなると……………。  
ダメだ。俺の頭では分からない。

こいつは人間とは違う感性で動いているので時々訳のわからないことで怒ったり喜んだりする。人の短い一生とは違って、悠久とも言える、気の遠くなるような時間を過ごしたらこういう性格になるものなのだろうか。

でもこいつの姉妹はそれぞれ方向性の違う奔放な性格をしていたものだが……………不思議だ。

まあ初めて出会った時に問答無用で殺しかかってきた頃のことを考えれば、こいつも随分と丸くなった、というか成長したものだ。俺たちが出会ってまだたった十年にも満たないけれど。

さて、どうするべきか。ティノアをこれ以上怒らせるのは絶対に避けたい。

こいつを怒らせたなら都内の一角が水没しかねない。そして我が家の水道代が大変なことになりかねない。これだけは何としても避けたいところなのだが……………。

しかしティノアの言うことを聞いて今からリベラリーゼに向かっ

てしまつては、また美刃に何をされるかわからない。

それに俺はただでさえ学園の成績が悪いのだ。この上学園を休み続ければ最悪退学ということもありうる。爺さんが骨を折って入学させてくれた学園だ。せめて二年は通いたいんだが……。

（私は大丈夫ですが）

（そりやお前には関係ないだろさ）

テーゼの突然の言葉は意味が分からないものだった。

うん。どうしようか。どうすればいいのか全くわからない。

とりあえずこのままだとパンが食べられないので右手でナイフに固定された水に触れる。

右手首に巻かれた腕輪に意思を通す。ティノアと同じ孤独な蒼い輝きを頭の中で灯す。すると、樹の枝が幾重にも絡まり合つて出来た腕輪から一瞬蒼い光が弾ける。

輝術の効果そのものを消し去るには、同じ輝色の系統レディアンズで、しかも同等以上の輝度ルミナンスで中和するしかない。

ナイフの表面にティノアではない蒼い光がまとわりついて、固定効果を失ったナイフが液体に戻る。

そして俺が左手で首の下に持つてきていたコップの中に収まる。

そして俺はそれを一気に飲み干した。

うん旨い。さすがはクラリシア原産の、人体に収める為に作られた水だ。一口で全身に潤いが行き渡る。

「あ！ ずるい！」

「ずるいじゃない。危ないだろ。切られたら痛いじゃ済まないんだ」

「イツヤなら大丈夫でしょ。右手が無くなつても死ななかつたし」

「そつという問題じゃない」

まあ、手首が削られるのと、首元を切られるの。どっちの方が死ぬ確率が高いのかなど分かりもしないが。……いや首を切られたら出血多量、呼吸困難ですぐ死んでしまうよな。つまり俺はさっきまで何よりも死に近い立ち位置にいたのか。

全然気づかなかつたよ。

「そんなことより……!」  
身を乗り出してきたティノアは浮かび上がって俺の目の前まで来た。

互いの唇が触れ合いそんなほど話すのには適さない距離。

互いの瞳をのぞき込めるような距離。

椅子は付いたままというのが妙に気になる。

椅子の足が床と平行になっているのが視界の端に映る。

頼むから食器は引っくり返さないでくれよ、と場違いな事を言いそつになった、そんな時。

ティノアの瞳の輝きが一瞬逃げるように明滅したのを俺は見逃さなかった

## 彼女の隠せない輝きは

潤んだように見えるティノアの瞳を見て。

ティノアが考えていることが少しだけ分かった気がした。

「お前。誰かに何か頼まれたな？」

そんな俺の当てずっぽうでしかない問いは凶星を突いたようで。巻き戻してもしたかのように椅子の位置が床に戻り。ティノアの人形のように精緻な顔が少し人間味を帯びた。

「な、なんのことかしら？」

こ、こいつ本当に隠し事が下手だな……。

そっぽ向くな。そっちは冷蔵庫しかねえぞ。

サイバルさん。あんた、こいつなんかを信仰してて本当にいいのか？

丸分かりだ。もう改めて問いただす必要も無い。

「で？ 誰に頼まれた？ あの冷血教区長か？ それとも派<sup>リ</sup>天<sup>ティ</sup>にでも頼まれたか？」

ティノアと直接話せる権限を持った人は多くない。

考えれば分かるはずだ。

ティノアの反応を見落とすな……！

「サイバルなんかの頼み事を私が聞くわけないでしょ！ それにはリディアわたしに頼み事なんてしないわ」

うん。この反応から見るにこの二人ではないらしい。

となると……あれ？ ティノアと話せるのは……誰かいたっけ？

おかしい。ティノアの反応から考えると誰かから頼まれて俺を連れていこうとしているのは間違いないだろう。しかし、ティノアに頼み事ができる人物……。

思いつかない！

だめだ。ブランクがあったとはいえ、ずっと一緒にいたティノアの単純な思考すら読めないなんて……！

頭を抱えて視界を閉じ、記憶を鮮明に思い出そうと目を瞑る。

数秒、だっただろうか。リベラリーゼで出会った人々の顔が浮かんでは消えを繰り返していたその時。

「イツヤの考えてることが少しだけわかるわ」

なに？ 俺はティノアのことを全然わからないのにティノアは俺の考えていることが分かったのか！？

「少し、うづうん。とても失礼なことを考えてる……！」

……すごく曖昧だけど間違っではないいな。

嫌な色を感じて目を開ける。

ティノアの目に先程までの単純な脅しの色とは違う、殺気が込められていた。

このままでは危険だ！

家計が！ 水道代が！

「て、ティノア。それは勘違いだ。俺は別にティノアは単調なバカだとか、無駄に年食ってる癖に見た目と同じで隠し事の出来ない子供みtainな性格だな、なんて微塵も考えてない！」

そっだ！

ティノアはもしかしたらサイバルさんに頼まれて俺を連れていこうとしたのかもしれない。それをいつの間にか身に付けた演技でそうと思わせない反応を見せたということも考えられる！

……いやいや。ティノアにそんなことができるわけない。

もう少しよく考えて発言しなければ……。

(もう遅いですけどね)

頭の中で色々と反省していると、蛇口を捻ってもいないのにキッチン水道から水が勢いよく飛び出した。

その水は排水溝に流れることなく、蛇のようにくねくねと食卓の周りに伸びてくる。

弾けた水滴は浮かび上がって、ティノアの周りに集まり始めた。  
一つ一つがくつついて大きな水球になっていく。

「……イツヤ。昨日の続きをしましょう。今度は手加減なしでね……」

この後に起こった出来事についてあまり多くは語りたくない。

ただ来客を知らせる救いの鐘の音が響くまで。家の中は水で造られた槍や刃物が入り乱れる殺人（未遂）屋敷になっていた。

水道代については調べたくなかった。

## レンズの向こうの輝きは

「引きこもりの不良少年が水浸しになって現れた」

庭で出会うなり物語のモノローグのように呟いたのは船見司。ふなみつかさメ  
ガネが似合う仏頂面の少女。学園のクラスメイトでもある。理知的  
と云えば聞こえはいいがこちらを見下すようなに見える瞳の輝きは  
俺の被害妄想が生み出した勘違い……だったらしいな。

「誰が引きこもりの不良少年だよ」

水浸しなのは否定できない。玄関に常備してあるタオルで軽く濡  
れてしまった服と髪を拭きながら、謂れのない中傷に不満を訴えて  
みた

道場で朝練するはずの時間は、家族との水遊びで消費してしまっ  
た。まあ十分に運動は出来ただけけど。

それよりも俺と船見の立ち位置は五メートル程離れている。話す  
には結構遠い微妙な距離だ。精神的にはこの距離の十倍くらい離れ  
ている気もする。

やっぱり俺って嫌われてるのかな。

「初等部の頃から失踪の常習犯拳句の果てに最長一年の行方不明記  
録を樹立。中等部の始業式から一週間行方不明。その後ひよっこ  
り顔を出して真面目に通いだしたかと思ったら、すぐにまたに休ん  
だり早退したりする始末。高等部になっても全然変わらない。そん  
な君のことを不良と言わず誰を不良と言えば良いのでしょうか？」

……そう言われると否定ができない。事実なだけに尚更。  
両親が死んだ後の一年間と中等部の始業式前日から一週間。俺はリ  
ベラリーゼに入り浸っていた。途中で帰ることもできない事情があ  
った。

（特に貴方が十三を迎えた時に起こった出来事は私にとっても衝撃  
でした。血で血を洗う過激な七日間でしたよね）

（捏造するな。俺にそんな過去はない）

(そうでしたか?)

あの一週間で俺が浴びたのは一人分の血と怨嗟だ。

(それは私の記憶にはないことですね)

(お前は寝てたからな)

(……中々面白いことがあったのですね)

あまり思い出さなくないことを思い出してしまった。

テーゼと話して黙ったままの俺に船見が怪訝そうな顔を向けてきた。

何か話さなければ。

「それなら不良なだけで引きこもりではないだろう? そこは撤回してもらおうか」

別にどう呼ばれても良かったのだが、何となく気になったので訂正を求めてみた。

「警察のご厄介になったという話も聞かなければ、どこかで見かけたという話しも聞きません。だったら家に引きこもっているという答えしか出てこないでしょう。……まあ、運動はしているようなので健康的な引きこもりと言った所でしょうか?」

「け、健康的な引き籠り?」

俺が水浸しなのを、運動後でシャワーでも浴びていたのだと思っ  
ているのだろうか?

いや。いつもならそういう朝を迎えるのだが、今日はティノアと遊んでいたせいでそういうわけにはいかなかった。

「いや、別に引きこもっているわけじゃないんだが……それに何で今更改めてそんなことを言うんだ?」

「……私にも色々理由があるのです。それに貴方のことは美瀬ちゃんにも頼まれていますから」

美瀬か……そう言えばあいつには昨日の復讐をしなければなら  
いな。

今日の予定を考えるよりも先にしなければならなかった。  
俺と知り合いというだけの関係性である船見には本当のことなど



を答えるわけにもいかず、口ごもってしまふ。何も知らない普通の人間に、地球とは違う世界に行つて色々なことをしています、などと言えば精神科を始め様々な病院を勧められるだろう。もし陽元の誰かにそんなことを言つたと伝われば俺の家の敷地に病院が建てられるかもしれない。

それくらい常識は俺にもある。

(そんな常識は捨ててください)

ただ船見は只の人間ではない。彼女はとある危険な組織から派遣された魔術師さんだったりする。中等部の二年の時にはちよつとした波紋を学園中に巻き起こしたものだ。

だから俺のしていることを話したら信じてくれるかもしれないが、今は話す気にならなかつた。

(貴方が他人を気にするなんて面白い冗談ですね)

何で笑つんだよ。

「では、いつもどこで何をして過ごしているのですか？ 色々と報告をしなければならなので、正直に答えてもらいたいのですが？」

「……報告？」

「冗談です。忘れてください。で、昨日の夜は何をして過ごしていたのですか？」

「……まあいい。取り敢えず何か言い訳をしないと。船見をここに遣つた奴のことを考えると適当なことを言うわけにもいかない。

うまく言い訳をしなければメイドさんと執事さんに拘束され、十時間にも渡る勉強会と言う名の説教を喰らう羽目になる。

身体の震えが止まらない。

「えっと、別に何も」

しかし上手い言い訳など何も思いつかなかつた。

我ながら残念な脳みそだ。

「何も、ですか」

「ああ、何も」

気まずい。数秒の沈黙が、気まずい。

(二回も言わなくてもいいですよ)

それほどに気まずい空気になった、ってことだよ。

「そうですね。それでは」

船見は振り返るとそのまま歩いていった。

学園に向かうのだろう。

「つて、え？ それでいいのか!？」

「なんですか？ 言い訳があるのなら早くしたほうがいいですよ。

私は凍津弥君が言ったことをそのまま美刃姉さまに伝えますから」

船見は美刃のことを美刃と呼ぶ。愛称みたいなもので気にすることはないのだが、何故姉さまと呼ぶのかは知らない。兄弟でもないのに。

まあ、そんなことはどうでもいい。

美刃にそんなことを報告されては昨日の二の舞になってしまう。

それだけは避けなければ。

「ごめんちょっと待ってください。いや待ってください」

(情けない。実に情けない)

(二回も言つなよ)

(それほどまでに今の貴方は情けない姿だった、ということですよ)

テーゼの俺に対する否定できない、云われある悪口を合図にしたように。

すたすたと歩いていく船見の歩みが若干遅くなった。恐らくは待たせているのだろう。

止まらないのが船見らしい。

俺は中身の入っていない鞆を手に取り、船見の後を追う。

施錠をしていないドアの隙間から突き刺さってくる、氷柱のように冷たくて鋭い視線を感じながら。

## 半分にされた輝きは

「さて、どうしようか？」

わざとらしく独り言を呟いても船見はこちらを見向きもしない。船見との登校中。俺は言い訳をするために頭を悩ましていた。

俺の中にいる異世界中から崇められている者達の裏側である存在も、このような件に関しては全く役に立たない。

(いつものことではありますが本当に失礼ですね、貴方は)

閑散とした住宅街から公園の中へ。

無駄に大きい噴水が立てる水の音が入園音だ。

自然の景観美を追求した苑池の庭園を彩る芝を踏みつけて。大きな建物の前に出る。

公共機関としても使用されている図書館だ。一つの校舎と勘違いしてしまいそうなほど大きい。まだ開館の時間ではないので勿論扉は閉まっている。何故か恐ろしく嚴重そうなシャツターで覆われているのもいつものことだ。けれど今日はいつもにも増して近づく気すら起こさせないような威圧感を感じる。まあだからといって俺に何か関係が有るわけでもない。

俺たちはその建物を左回りで沿うように進む。正式な通学路よりも若干距離が短い抜け道を二人で歩く。

無言で。

あまり知られていない道なので他の生徒の姿は見えない。図書館と隣の建物の間は俺と船見が横に並ぶと互いの肩が触れ合ってしまうほどに狭い。

隣の建物は青空の下で食べられる第二の学食という名を謳うレストランだ。そこから匂った食欲を刺激する香りが、十分な朝食を食

べ損ねた俺の腹の虫を鳴らした。

「朝食、食べてこなかったのですか？」

もうそろそろ学園の敷地に入ろうかとしたところで船見の足が止まった。船見からの冷静でありながら何処か深い感情を秘めた突然の言葉に驚きながらも、俺は至極素直に答えた。

「いや、食べたけど」

「なにを食べたんですか？」

「食パン半分とコップ一杯の水」

サラダは朝のどさくさで食べられなかった。

(自業自得です)

「……私より少ないですね。それで昼まで持つんですか？」

「ああ、昼までは寝るからな」

「堂々と言いつつ切りますね。姉さまに報告する件がまた一つ増えたようです」

「……しまった。つい本音が。」

「じ、冗談だつて。本気にするなよ」

「……まあいいでしょう。私もさつき下らない冗談を言いましたからね。これであいいですよ」

「え？ お前、冗談なんて言つてたつけ？」

記憶にない。えっと……何か言つてたつけ、こいつ？

「……覚えてないならいいです。……そうだ、良かったらこれ食べます？」

そう言つて船見が取り出したのはチョココレートの菓子だった。ウエハースをチョココレートでコーティングしたもの。

「いいのか？」

空腹の俺には胃から伸びる手が喉から飛び出しそうだった。

……いけない。空腹のあまり日本語すらまともに考えられなくなってきた。

しかし、いや、待て。

これは怪しい。

さつきまであんなにすぎない態度だったのにいきなり菓子を恵んでくれると言うなんて。

もしかして薬でも入っているんじゃないのか？

昨日の美瀬と同じように睡眠薬が何かで俺を眠らせようとしているんじゃないか？

そしてまたあの狂人を楽しませるイベントを発生させて、何処かに開設した会場に連れていこうとしているんじゃないか？

(考えすぎです)

(いや。あれの手下二号であるこいつならそれぐらいやりかねない) 「全部はあげませんよ、半分です。私も朝控えめだったので小腹が空いたんです」

半分か。それなら薬も毒も入っている心配はないか。

「どうぞ」と言われ差し出された菓子をつかむ。俺がつかんだ方はホワイトチョコレートのコーティングだった。船見が反対側を掴みパキッと割る。

俺が「いただきます」と言い、船見が「どうぞ」という。けれど互いの手にある菓子を口に含んだのは同時だった。もしかしたら俺にだけ食べさせて船見自身は食べないのかもしれない……などと考えていたわけではない。

船見が口にしたのと同時に菓子を食べた。俺は貰った菓子を一口で口の中に放り込み、無造作に噛み砕いてしまった。

そんな品性という言葉が欠片もない俺と違って、船見は一口一口ちよつとずつ食べている。綺麗な口元を気にしながら。

「……そんなに見つめないください。恥ずかしいです」  
「何で？」

何故か顔を赤くする船見は俺に背を向けて菓子を食べ終わると早足で学園へと向い始めた。急に変わった船見の歩調に合わせて俺は着いていく。

門が見えたところで急に船見が止まった。俺は船见到衝突する一歩手前で止まった。

「あの、美味しかったですよね？」

船見は俺に背を向けたまま尋ねてきた。俺は先程された問いと同じように答えた。

「うん。旨かったな」

「私も嬉しかったです」

船見の返答に疑問符を浮かべながらも。

空腹を満たした甘味の余韻を味わいながら。

学園に近づくに連れて次第に増えてきた生徒達の流れに乗って。

公園と、とある一家の私有地を跨ぐように建てられた、私立幹能見学園の門をくぐる。

## そこではよく見る輝きたち

公園の中にある異色の学園。

もう随分過去にあつた世界大戦。その際の首都空襲で燃えなかつた森と言われるいわくつきの土地。現在は公園という名の私有地となつている。

その中に作られた異色の学園は以外にも人気があつた。新しく作られたと言うのも一つの理由なのだろうが、広大な敷地内にある様々な施設には目を見張るものがある。部活動に必要な敷地と施設はもちろん、何に使うのかも分からない専門的なトレーニングルームの数々や、様々な研究施設。帰宅部の俺は利用したことがないので知らないが、それはもはやプロの競技者や学者達が使用するものと比べて遜色ないとさえ言われている。

あと病院もある。小さいけれど常に一人の医師と一人の看護師が詰めている。俺も一度お世話になったことがあるのだがこれがまたすごい先生だつた。打撲や打ち身をすぐ治す医療器具や、見たこともない色の薬を使って様々な病気を直す。その姿は俺のよく知るリベラリーゼの治癒術士と比べても遜色がない。

全ての蔵書の題名を読むだけで何年かかるか分からない数を備えた図書館。

公園の緑の中食べられるレストランの味は一般的な学食のそれを超えている。

他にも様々な施設が有るらしいが覚える気にもなれない。

ついでに付け加えておくと部活動と同好会の数を合わせるとんでもない数になるらしい。この前話した生徒会長が煎餅を食べながら「もう対処できひんわ」と愚痴つてた。

もちろんそんな施設を利用できるのは才能も実力もないその他大

勢の人間たちではない。

この学園には日本中からではなく世界中から学生が集まっている。この学園の理事長である陽元密木<sup>ようもとみつぎ</sup>。俺の爺さんの知己でもあり、俺が学園に入学するにあたって便宜を図ってくれた恩人。美刃や美瀬の祖父。

彼は世界中から特別な能力を持つ子供たちを集めていた。

「おはよ〜凍津弥<sup>いっしや</sup>。司ちゃん<sup>しかん</sup>。今日も私に会いに来てくれ。って何で閉めるの!？」

教室のドアを開けると普通に可愛い顔が見え、声が聞こえて来た。けれど出会いたくない奴のものだったのですぐにドアを閉めた。

朝一番に嫌な顔を見た。頭が痛いぜ。

(その頭痛はおそらく空腹による血糖値の低下が原因ではないでしようか?)

(う〜ん。でもさっき糖分を摂取したからな。やっぱり原因はあいっだろ)

もう少し外で時間を潰して、ホームルームぎりぎりになってから教室に入るとしよう。

どこで時間を潰そうかな

……そうだ。屋上にでも行くか。

この校舎の屋上は見晴らしがいいんだ。この教室からの眺めも良いんだけど屋上は更に遠くまで見渡せる。学園全体どころか、学園を囲む公園全体を見渡せるのも良い。緑は目にも優しいし。

そう考えて。教室とは百八十度反対に体を向ける。

「何してるんですか? そんな所に立たれると邪魔ですよ、早く入ってください」

……。

そうだった。

船見が俺を監視するように付いてきていたんだった。



ちよつと寄り道しようとして方向を変えると、すぐに引つ張られる。最短ルートから外れただけで、だ。トイレに行きたいって言ったときには入口にまで付いてこられた。

ストーカーかよ！ と突っ込みそうになつたが船見は美刃に頼まねなきや俺になんて近づきたくもないはずなので、口にはしなかつた。そんな的外れな指摘は俺胸の内にいる存在に大声コンテストに出場しているつもりで放つて置いた。

(…………… 実にいい声でした。心の大声コンテストがあれば貴方が世界一でしょう。もちろん審査員は私一人しかいませんし、出場者は貴方一人しか居ないわけですからコンテストにすらなりはしないんですがね)

テーゼに突っ込まれた。流石に俺の声が五月蠅くて苛々したのかテーゼの声は若干低い、よくな気がする。

(ちよつとごめん)

「いや、ちよつと頭痛がして。屋上で風に当たろうかと」

「そんなこと言つてサボろうとしても駄目です。美瀬<sup>みせ</sup>さん。おはようございます」

そう言つて船見は開かれたドアの中に入っていった。信じてもらえなかつたな。頭痛は本当のことなんだが。

「そうだよ。そんな所にいないで席に着こうよ。それで昨日の反省点からお話しよ」

ドアを開け、顔だけ廊下に出してきた女、陽元美瀬。モデルのよくな姉とは反対の可愛らしい容姿。端正な顔つきではある。が、姉に似て性格に難有りだ。いうなれば浅瀬だ。水深が浅い分、知り合つて思わぬ所で怪我をする。深みに嵌ると抜け出れない。あと干満という名の、喜怒哀楽の差も激しい。

「…………… お前と出会つたことが俺の人生の反省点だ」

これは余計な一言だった。

こいつは無視するのが一番なのに。

「傷ついた！ 今の一言で私の心は酷く傷ついたよ！ 凍津弥の私への態度に猛省を要求す」

両手を上に掲げて怒ったふりをする美瀬を無視して船見と話す。

「なあ船見。さっきのチヨコもう一個ない？」

「ないですよ。あまり甘えないでください。鬱陶しいです」

そう言っただけで船見は自分の席に向かっていく。朝の優しさはなんだったのかと言うほど取りつく島もない。こいつもこいつでよく分からない性格だ。

「ちよ、ちよつとい、つ、や！ わたしを無視しないで！ 昨日は大変だったんだからね！」

大変？ こいつの何が大変だったと言うんだ。

美瀬の奴は無視して船見と一緒に席に着く。

俺の後ろが船見の席だ。開いていた窓から吹き込んでくる春風が気持ちいい。

窓の外には公園の緑地と青と白の空、遠くには何十階建てかも分からない建造物の群れ。

緑と青と白と灰色。こう見るとこの景色も四色ではある。輝きは足りないけれど。

そんな色と光の足りない景色を意味も無く眺めていると。

「……………えい」

後ろから寒気のする殺気と同じものを纏った鳴弦めいげんが響いた。

その音と同時に頭を下げる。俺の頭があつた場所を何かが通り過ぎていった。窓から外に飛び出たそれは何処までも飛んでいく矢のような……………矢だった。

重力に従って、緩やかな放物線を描いて落下していく。

「やー！」という掛け声は空手部と合気道部と総合格闘技部が合同練習している声だろうか？ 窓の向こうに見える数十人が拳を突き出している。

「やあああああ！？」今の声は矢が降ってきたことに対する驚きの

声だろう。そりゃ空から矢が降ってきたら誰だって驚くよな。俺だって驚く。

「いーつや」

教室と廊下の境目。開きっぱなしのドアの前から。絶叫を上げさせた声の主にして、いつにも増して惚けた顔の女の子、みどりのまゆ緑野咲良が俺に向かって気の抜ける挨拶をしてきた。

無愛想な表情に長い黒髪。有名な工芸師が意匠を凝らして作り上げた日本人形と見間違う容姿。そのまま立っていれば高貴な血筋の姫君かと誤解してしまいそうだが、そうはいかない。

何しろ身の丈に近い大きさの弓を持って、矢を携え、俺を狙っているのだから。

「放てー!!!」

咲良の後ろにいた美瀬が大きな声を上げる。その掛け声と同時に咲良の手にある弓から矢が放たれる。

俺はその矢を首を傾けることで躲す。

矢は俺の後ろ髪を数十本奪った後。

「ぎゃー！　またやあああ!？」

窓の外から絶叫を響かせた。

祭りで花火が打ち上がった時みたいに。

まーたやー……ちよつと違うな。

朝早くから着ている数人のクラスメイト達からは疎らな拍手。見世物じゃないんだけどな。学園柄見慣れているからか、今程度の光景には驚くどころか冷静に見つめてくるクラスメイト。

美瀬は「ちつ」と舌打ちをして。

咲良は無表情のまま俺を見つめている。

「おはよう咲良」

俺はそんな咲良に声をかける。たった今俺に向けられた殺気はまさしく本物だった。けれど咲良は訳も無くそんなことをする奴じゃない。原因は間違いなく咲良の後ろで悔しそうにしている美瀬の奴なのだから。

「おはよ、いつや」

咲良が返事を返してくる。

か細い声だけど向けられた相手にしつかりと届く声色だ。聞いていて心地が良い。

「で？ これはどういうつもりだ、美瀬」

俺は弓を撃った本人でなく、彼女の後ろにある椅子の上に立って俺を指さしていた美瀬を睨んだ。

「べつにー」。私を無視して司ちゃんと話す凍津弥なんて咲良ちゃんに射抜かれて死ぬ！ なんて思ってないよ」

馬に蹴られてくみたいに言うな。船見とお前は恋仲か。俺と船見の会話を邪魔するお前が蹴られる、じゃなかった射抜かれる。

というか同級生に同級生を殺させようとするな。

「……美瀬？ いつやはこれくらいじゃ死なないよ」

後ろに立つ美瀬を見上げながら。咲良は不穏当なことを言う。

「おい咲良。ちょっと待て」

「そつだよね」。やっぱり凍津弥を殺せるのはお姉ちゃんだけだよね？」

俺の声を遮るように。美瀬の声が教室中に響く。異性も同性も惹きつけてやまない笑顔をしながら。

朝早くから登校している真面目なクラスメイトたちは何故か訳知り顔で頷いている。

え、何で？

咲良は困った顔をしながら片手で弓を折りたたみ、十字架の形をしたアクセサリに戻している。相変わらずどうなってんだ、その弓？ 新車の折りたたみ傘か。

そして咲良はその十字架を首にかけ、十字を切る仕草をしながら。「だめ。いつやをやりたいならびんだけじゃ足りない。びんとわたしが協力しないと。いつやはつよいんだから」

咲良の奴も美刃の事を美刃と呼ぶ。昔からなのでこいつに関しては何も言うことはない。

もし耳栓でもしていたら普通に話しをしている可愛いクラスメイ  
ト、という絵面なんだが。

響いてくるのは死やら殺やらの言葉ばかり。やりたいって怖い言  
葉なんだね。

「それはナイスアイデア！ 今日カソードの放課後は『不良少年』白片凍津  
弥VS『陽極』陽元美刃&『弓殿』クリスバ緑野咲良！ これは満席間違い  
なし！ 早速手配を」

美瀬が勢い良く教室を飛び出そうとしたのとほぼ同時に。

俺は後ろから美瀬の制服の襟を掴んでいた。

制服の襟はとも掴みやすかった。

美刃がよく掴む理由も分かった気がした。

## その二つ名は輝かない

幹能見学園には二つ名を持つ奴らが数多くいる。

それは部活動を積極的にもりたてるため、昔の生徒会が作り上げた部活動の予算配分システムが原因だと言われていた。将来を囑望された多くの特待生を抱えるこの学園は、学業や部活動に関して少し特殊なシステムを組んでいる。

部活動の基本的な予算は単純に公になっている成績と、部員の数によって決定される。

それに上乘せされる部分がある。

これは飽く迄も一例だが各部活動には公演が許されている。多数の観客の前で芸や音楽を演ずるだけでなく、他校の生徒との競技試合や、学園内の部員同士で試合を行って客を誘う興行が。

ただ客から金を取るわけじゃない。生徒会役員によって録画された映像をその道の専門家に品評させる。品評される項目は、チームとしての結果と、個人としての結果。そして観客数と観客の満足度。それらに応じて各々に点数を付けられる。

そしてその点数に応じて、予算が配分される。チームとしての結果にはその部活動に。個人としての結果には部費の名目で個人に。現在の日本に施工されている法に抵触しない限り、その金銭の使用方法に関して学園も生徒会も一切関与しない。個人としてどのように使用されようか。

部活動で優秀な結果を残せるのなら、それはアルバイトなどより遙かに身入りの良い労働となりうる。そして分かりやすい評価の対価は、生徒の学園生活の動機付けに大きな影響を及ぼしていた。

そしてそれを取り仕切るのが美瀬も所属する生徒会だ。

本来ならば部活の長である部長が生徒会に申請して、生徒会長が

許可し、ある程度の準備期間が必要なこの勝敗だけがかった試合<sup>ゲーム</sup>ならぬ、参加する人間の評価が掛かった戦争<sup>ゲーム</sup>。

生来のお祭り好きである美瀬は、その人脈の広さと個人的な能力と世界的にも有名な財団である家の力を借りて、僅かな時間で執り行う。

特に剣士として全国的にも有名な美刃が絡む一件になるとその力は何倍にも増し、どここの日本選手権だ！　と言わんばかりに人が集まることもある。

そして向けられる声援はこのアイドルだよ！　言いたくなるほどに盛り上がる。初めて対戦相手として付き合わされた俺からすれば非常に恐ろしいものであった。俺が少し動くだけでブーイングの嵐。悪役<sup>ヒール</sup>というものはかくあるべしとでも言いたげな扱われ方なのだ。

プレッシャーに弱い小心者の俺にとってはそれだけで一生のトラウマになりそうな程に恐ろしかった。

人の視線というものは、いや視線に限らず大勢の人の意思というものは現実に恐ろしい影響を与えるものなのである。

まあ人に見られるプレッシャーを学生時代から経験しておくということは将来きつと役に立つのだろうとは思ったがそれは勘違いだった。

正直二度と浴びたくないものだと思った。注目されるということのはあの視線に晒され続ける、ということだ。俺はこれ以上学園生活で決して目立つまい、と心に決めていた。そう決めたときにはもう遅かったのだが。

他にも各部活動同士による予算争奪戦やら様々なイベントが生徒会の管理の下、生徒の自主性により執り行われている。

個人的に言わせてもらえるならば、生徒会と言うよりは学園そのものがその金銭目当ての争いを許容している感がある。

幹能見学園の理事長でもあり大財閥の会長でもある陽元密和

先程も名前を出したが、これが面白い人で、政界財界に限らず世界各国の枢機の人物にも顔が利く恐ろしい人物である。学生の自主性を多分に認めるために、この国の法律を変えたことも多々あるぞうだ。

「未知の物事に取り込もうとする若者の冒険心を尊重するため」とか宣のたまつてらっしゃった。これは美刃から人伝に聞いた言葉でしかないが、俺はそれを聞いて成程な、と思った。

社会的に問題だらけである俺のような人物の入学を認めるからどんな人物かと気になっていた。聖人のように懐の深い人が、それとも悪童を更生させようとする教育精神に溢れた人物か。それとも底抜けの阿呆か。

「底抜けの馬鹿じゃよ」と俺の爺さんは言っていた。そしてそれは間違いではないのだな、ということを確認したのは初めて出会った時のことだ。

成程美瀬や美刃はこの祖父の性格を強く受け継いだのだな、と確信したのもこの時だ。

……話が外れてしまったが、まあその点数や評価のされ方によって目立ってしまった生徒は、生徒会のなんちゃらリストに『登録』される。多くの学生が集うこの学園で、その人間を分かりやすく例えることのできる記号。それが二つ名だ。

二つ名を付けられた人間は大勢いるが、その中でも特に有名なのは『陽極カソード』と『弓殿クリスパ』だ。彼女たちは中等部のころから有名で、名だたる業績を積みながら今も精進を続けている。彼女たちはその容姿と相まって学内に限らず多数の、いや大多数のファンを抱えている。

それと比べても俺の肩書きは普通だ……せつかく付けられるんだつたらもつとかっこいい名前がよかつたな……『不良少年』って。日本語のまんまじゃないか。せめてB-boy……いや、ないな。常識的に考えて。っていつか俺ブレイクダンスなんてできない



し……。

いや待て。そんなことより。

「待て美瀬。動くな」

喜々とした表情で教室を出ていこうとした美瀬をかるうじて捕まえた。

「はくなして！ 私には使命があるの！」

「離して欲しければその使命の内容について話してみる。それが俺に害を及ぼすことでなければすぐに離してやる」

「……さつき私が言ったこと忘れちゃったの？ さすが凍津弥！ 相変わらず空っぽの脳味噌」

「それは俺に許してもらおう可能性を放棄したと考えていいんだよな」

俺は襟を掴んでいた右手を美瀬の首に移し、がっちりと捕まえる。

「……んっ……っ！？ ちょ……あ、だ、だめ……そこは……だめなの……」

ん？ 美瀬の様子がおかしい。

「へ、変態……どこ……掴んで……るの……」

「どごっつて首だろ。人聞きの悪いことを言っつな。あと俺を玩具にしようとするな」

「首は……んっ、だめ……そこ、そんなに……強く……うう」

首を左手で掴んだ途端美瀬が大人しくなった。廊下の前で水分を吸われた植物のようにしなびて座りこむ。

「お、おねがい……凍津弥……手、離して……そこは、だめなの……」

息も絶え絶えに。そのまま倒れそうな息遣いの美瀬。顔がすごい赤い。

……面白いな。いつも人を弄って遊ぶ奴がこんな反応をするなんて。

……もっと強く握ってみようか？

「凍津弥君。教室でいやらしい行為はやめてください。美刃姉さま

に言いつけますよ」

席に座ったままの船見がこちらを冷たい目で見ていた、というか見下げ果てていた。

「……わかったよ」

クラス委員長である船見に注意されては仕方がない。……決して美刃に恐れをなしたわけではない。

（何を今さら。貴方が彼女に怯えているのは誰から見ても明らかでしょうに）

深呼吸のように大きな息遣いをしながら、潤んだ目をしている美瀬の首から手を離す。

だがこれで終わったと思うなよ。昨日の復讐はまだ済んでいないんだ。

廊下と教室の境目に座り込んだ美瀬の手を掴んで引きずる。こいつを自由にしては危険だ。教室の席にでも縛り付けておくでしょう。

「ちょ、痛い！ 凍津弥！ さつきから何するのよ！ もうちよつと優しくしてよ！」

仰向けで引きずられる美瀬が暴れる。運びづらいな。

……そうだ。思い出した。

「優しくしてほしいんだよね？ だったら……」

軽く引つ張って起き上がらせる、と見せかけて勢いのままに美瀬自身を抱える。

「……え？」

美瀬の顔は俺の真下に。何が起こったのか分からないという顔で俺を見上げている。

以前美瀬の姉である美刃とひと悶着あったとき、あいつが足を捻って歩けないことがあった。その時俺は美刃を抱きかかえてあいつの家まで連れていった。そのときあいつはずっと悔しそうな顔をしていた。

こいつも姉に似て自分の弱いところを見せるのが苦手な奴だからな。こんな風に抱えられるのなんて屈辱だろう。

「どうだ？ 美瀬？」

俺の胸元にある綺麗な顔に話しかけると。

「えっ？」

……意味のわからない音を瑞々しい唇から発した。

「あっあっ」

俺が首を傾げるとまた変な声を発した。顔は先程よりも真っ赤で目が右往左往している。

……さっきから何言ってるんだこいつ。悔しすぎて頭がおかしくなったのか？

「おい、美瀬？ 大丈夫か？」

「だ……だー」

「赤ん坊かお前は。頼むから人に分かる言語で喋ってくれ」

「だ、だいじょぶよ。わたしいつもどおり」

「呂律が回ってないぞ。大丈夫なのは疑わしいし、いつも鳥ってどんな鳥だ」

今のお前のように真っ赤な鳥か？ それとも目がキョロキョロしてる鳥か。そう言えばチョコットボールのマスコットキャラクターって鳥をイメージして作られたんだっけか。

（今は限りなく関係ない話ですよ。横向きなのに両目が正面に並んでいるキャラクターのことなんて）

（いや、そうなんだけどな。何だか今の美瀬を見てみると胸が高鳴るからそのキャラクターを被せて誤魔化そうかと思って）

（私に正直に話してくれるのは嬉しいんですが……。まあそれは良い兆候です。そのまま口付けでも交わしたらいかがですか？）

（するか）

「だ、だい、じょうぶ、よ！ それ……より！ どういうつもりよ……いきなり……こんな……お姫様みたいに……」

「は？ お姫様？ 何言ってるんだ？」

お前はお姫様に毒リングを売りつける魔女の方が似合ってるだろ。いやそれよりもお姫様と魔女を躍らせる魔法の鏡の方が似合ってる

か？ まあこいつなら最後に割られるなんて最後は迎えないだろうけど。

「だ、だってこんな風に抱きかかえるなんて……これって……」

「何を言ってるのか良くわからないがお前背の割に結構重」

美瀬の個人情報教室という不特定多数の人間が居る中で曖昧に言おうとしたときには。美瀬の強く握られた拳が俺の顎目掛けて振るわれた。

しかしそんな遅い動作では俺には当たらない。もっと速く鋭いものにいつも襲われているんだ。美瀬のゆったりとした拳の動きなんて止まってみえ

「えい」

しかし避けた位置に正確無比な拳が振るわれた。美瀬の緩慢なものではない、プロボクサーのストリートと見間違えんばかりの拳速。しかしその拳には威力がない。俺の肌に触れた瞬間に止められた拳はいつも通りの朝の挨拶。

いつもなら片手で受け止めるんだけど今は両手が塞がっている。

その隙をついてもう片方の美瀬の拳が俺の顎を捉えた。

ちよつと痛い。

「相変わらず楽しそうだね、凍津弥、美瀬」

爽やかな笑顔は朝日に照らされ直一層眩しく見える。

「鳴和？ 美瀬と示し合わせでもしたのか？」

「嫌だな、僕が美瀬の味方？ そんなことは死んでもしないよ。僕はいっつになく無防備な凍津弥が気になつてついついちよつかいをかけただけさ。見ていて悔しかったんでね」

深北鳴和。細身でありながら鍛えていると分かる身体で、総合格闘部に所属している俺の友人。美瀬や美刃が起こす事件の主だった共通の被害者でもある。共通の加害者を持つ相手は友人、である。

「ちよつと鳴和！ 凍津弥に近づかないでよ！ 危ないでしょ！」

「何が危ないって言うんだい？ 危ないというのなら凍津弥の首に腕を回して抱きついていている君の方がよっぽど危ないだろう？ さっ

さと凍津弥から離れたらどうだい？」

俺を挟んで睨み合う美瀬と鳴和。

「お前ら、俺の耳元で喋らないでくれ」

美瀬は抱きかかえられても悔しがったりはしないようだった。当初の目的も忘れて、俺は腕から力を抜いた。

「きゃっ！」という可愛らしい声をだして教室の床に尻もちをつく美瀬。

「うーん。朝から大変な目にあっちゃった。凍津弥の掴み方はちょっと気持ちよかったけど」

そんなことを言いながら下を向く美瀬の顔色は覗けない。

「大変だったのは俺の方だろ。昨日はお前のせいだ……」

ティノアとの約束の時間に遅れて気絶させられて。気絶していたのに攻撃されて。

「死ぬかと思っただんどぞ」

「なに言ってるの？ 昨日は大したことなかったじゃん。木刀も二本しか折れなかったし。壁に穴も空かなかったし」

まあ確かに。

ティノアとの一件を除けば昨日は手ぬるい一日だった。

美刃の剣筋は少々鈍かった。いつもの我が剣に絶てぬものなし！と言わんばかりの力強い気迫も感じられなかった。なにかあったのだろうか？

「そう言われりゃ……そうだな。しごきも勉強もいつもより緩かったな」

「そうだね。昨日の放課後は僕も呼ばれなかったしね。美刃姉みはねえ、何かあったのかな？」

教科書の書き写しも五時間ほどだったしな。本当に手ぬるかった。いつもなら倍は拘束されていたはずだ。

「そうでしょ？ 最近のお姉ちゃん、家ではいつも静かなんだ。怖いくらいに」

美瀬がそこまで言うとは……。

けれど。

「それはすごい良いことだろ」

「そうだね。少し心配だけど。静かなことはいいことだよな?」

一々事を荒立てて大きくする人間が静かなのはすごい良いことだ。俺にとっても鳴和にとっても。

「え〜? ひどいよ〜。お姉ちゃんのこと気にならないの?」

「ならない。昨日は剣筋が鈍かったただけでそれ以外はいつも通りだっただろ。心配することはねえよ」

「う〜ん。でもなあ〜。気になるんだよな〜。私が聞いても『心配することはない!』の一点張りだしな〜」

今のつて美刃の真似か? 兄弟なのに似てないな。似せる気がないだけかもしれないが。

「ほっときゃ治るだろ。あいつのことは心配するだけ時間の浪費だ。今までだってそうだっただろ。それに……あいつは陽元美刃だぞ?」

……何があってもあいつは自分を貫くさ  
何時だって、輝いている奴だから。

「……それもそうだね。凍津弥、ありがと」

似合わない思案顔で数秒。そこから満面の笑み。表情がコロコロと変わるところは姉妹そっくりだ。

しかし。

「え? あ、ああ」

俺は戸惑ったような声をあげてしまった。

いつもなら俺の言葉などでは納得しないで、無理矢理俺をけしかけるはずなのに……。

美瀬も……いつもと違う?

「おはよ。なるわ」

「おう!??」

いつの間にか咲良が俺の背中に寄り添うように近づいていた。そして俺に背中を預けながら鳴和に挨拶をしていた。

背後霊みたいに俺に寄り添う咲良。こいつは相変わらずだな。ま

るで暗殺者のような気配の絶ち方だ。視界にいなきや、触れていなきや幽霊と勘違いしてしまいそうだ。

「おはよう咲良ちゃん。あ、そうだ。これ咲良ちゃんのでしょ？外に刺さってたから持ってきたよ」

「……ありがとう」

そう言って鳴和は左手に持っていた三本の矢を咲良に渡した。

「……一本多くないか？ 俺に向かって打たれたのは二本だったはずだ。まあ鏃は赤くなっていないので人に当たったということはないのだろう。」

「しかしもう一本……。一体何に使ったんだ？」

けれど矢を受け取って矢筒にしまう咲良が、何かに気づいたように二つの黒い包を鞆から取り出した事で、それを手渡されたことでそんな一文の得にもならない疑問は薄れた。

「これ。お弁当。よかつたら食べて」

その片方を俺の方に差し出してきた。

「弁当？ え？ 何で？」

「昨日は二人とも、お昼ご飯食べてなかったから、今日もかなって思ってた」

俺が昨日のように昼飯を食べられないって思ったのか？ 俺は昨日財布を忘れただけだったのだが……。

鳴和は昼休みに美刃の特訓に連れ回されて、胃の中のものをリバースしていただけなのだが。

「良いのか？」

「うん。たべて」

咲良は無表情のまま最小限の動作で頷いた。

「……じゃあ遠慮なく」

「いやー、女の子からお弁当もらうなんて生まれて初めてだよ！ありがとう咲良ちゃん！」

訝しむ俺に対して鳴和は凄く喜んでる。

まあ本音を言うなら俺もすごく嬉しい。けど昨日美瀬がくれたハ

ンバーグに一服盛られた件もあつてか素直に喜べないで  
疑りの眼差しを黒い包の弁当箱にぶつけていたところ。  
「ぐー」っと俺の腹の中を寝床にしている虫が餌を寄越せ！ と鳴  
いた。ちよつと、いやかなり恥ずかしい。

.....

「咲良。ありがとう」

咲良は「ん」と一言だけ言つて自分の席に戻つた。

お昼用に作つてくれたんだろうけど今すぐ頂こうかな。

(その掌を返す速さ。とても立派です)

何故か全くわからないが、テーゼの声は褒めているように聞こえ  
た。

俺が早速机で弁当を食べていると、周りからとても痛い視線を感  
じた。

特に俺の後ろの席の奴と、その隣の席の奴から。



## 盗めない輝き

左に一つ、前に一つ。

私の左斜め前の席。

幼馴染の席。

私　陽元美瀬の視界に見慣れた顔が映る。

また遠くを見ている。公園の中にある数え切れないほどに群生する木々の向こうを。

授業も聞かず、ノートも取らず、黒板の方など見向きもせず。担任の都喜先生が睨んでいるのにも気づかず。

ただ窓枠が示す先の風景を寂し気な目で見ている。

彼が見ている景色はいつもと変わらない退屈な景色のはずだ。少なくとも私の目にはそう映る。

けれど。彼はあの景色に何かが見えているかのように時々楽しそうに微笑むのだ。

私はその顔をずっと見ているのが好きだった。

「いっつや！」と、その顔をこっちに向けて欲しい衝動に駆られて声をかけようとする口を慌てて押さえつける。

私の口と手は時々私の意思に反した行動を取る。

お爺ちゃんから貰った最新式のシャープペンシル型カメラ『カメラペン』をいつの間にか手に取っているのも私の意思じゃないので許して欲しい。

……バレなきやいいのよ、と思っているのはこの右手。

私じゃない。

きつと。

そんな勝手な右手が一回二回とシャーペンのサイドノックを押し下してしまう。普通に芯を出すのなら最上部のノックを押せばいい。

サイドノックでも普通に一回押せば同じように芯が出てくる。

けれどサイドノックを一、二、と二秒間ゆっくり押すと、その度に一枚、また一枚と私の右手が売れ筋商品を産み出す。カメラのレンズはペンの握りの窪んだところ。普通にこのシャーペンを使っただけでは絶対に気づけない。

いつもはとても綺麗に写ってくれただけど、こつやつてイヤの顔を撮る時だけは偶に撮れないことがある。何故か時々真っ白い光だけが写る。まあ凍津弥の席は窓際なので日の光りが反射してしまっただろうから、しょうがないんだろうけど。

一番良い顔だけはいつも撮れない。

そんなうまく撮れてないかも、という可能性を理由に何枚も何枚も撮ってしまう。全部綺麗に撮れているのなら二十枚ほど凍津弥コレクションが増えた筈だ。

ともあれ。

せつかく私の右手が生み出したものを私だけが楽しむのは申し訳ないので私が有効活用させてもらっている。

……凍津弥のあの表情は高く売れる。私の密かで高額な収入源になっているのだ。

……おつとつと。

これは写真部の子にばれたら肅清されてしまうので秘密なのだ。

私は独自の秘密ルート（学園の裏サイト）で多くの写真を販売してしまい、写真部の売上げを凄く勢いで減らしてしまったのだ。

写真部でも売れ筋トップである美刃お姉ちゃんの家での写真やお姉ちゃんに次ぐ売れ筋を誇る咲良ちゃんのお私服姿の写真。同じくらい人気のある司ちゃんのお眼鏡を外したときの写真などが私のメインウエポンだ。（何故か凍津弥は司ちゃんが眼鏡を外したときの写真だけ買い取った。私の写真は一枚も買わなかった。普通の値段の五割増しにした。私の写真の価格は時価である）

私が写真を販売しているのはお姉ちゃんにも秘密にしている。

だって嗅ぎつけられたら溜め込んだ秘密の写真集も陽元家の共有財産にされてしまうから。

だからこの秘密を知ってしまった人はちょっと可哀想な目に合ってもらおう。簡単に言うのと記憶を失うまで拷問する。

他人の命より私の秘密。

例え知った人が私の友人でも私は容赦なく拷問するだろう。

というか少し前に鳴和にやっちゃったし。

これも秘密だ。

くくくくく。

今日も右手が獲物を求めるぞお〜……なんて独り芝居を心の中で繰り広げるのは凄く寂しい。

寂しいので凍津弥に熱い視線を送ってみる。気づいてくれないかな〜って。

そうやってじーっと見てみると、凍津弥の顔が冷たくなったり笑ったりを繰り返している。まるで見えない誰かと話をしているかのようなのだ。

……こうしてみるとただの危ない男の子だなあ〜と思わない訳じゃない。けど宇宙電波交信部の子達はもつとおもしろ……じゃなかった、危ないし。それに加えれば全然危なくない。

それに凍津弥は彼らとは決定的に違う顔をするところがある。

まるで愛おしい物が視界に写ったかのように。

大切な何かを思い出したかのように。

彼の顔は全てを惹きつけるように輝くことがある。

彼は色取り取りの感情を表情に乗せる名俳優のような顔をするのだ。

それは昔、凍津弥がお姉ちゃんに向けていた顔とよく似ている。

何時からだだったろうか。彼があんな風になったのは。

初めて出会ったときは……学園の初等部に入る前のことだったか

な？

初めて見たときは女の子だと思っていた。昔の写真を見ても女の子だと思えない。いつも女々しく泣いていて、少し遊んだだけですぐに咳をして苦しそうにする弱い子供。

だからその子が男の子だと知ったときは結構驚いた。

勝気で男の子と喧嘩ばかりしていた私のことを守ってくれた時、初めて男の子だと知った。私が男の子達に泥水を掛けられたとき、男の子たちに対してとても怒ってくれたのがきっかけだ。

何故凍津弥があんなに怒ってくれたのかは今も分からない。

まあ私は彼を髪フェチだと信じて髪の手入れだけは怠っていないんだけど。

だから分からない、というのは嘘かもしれない。間違いなだけかもしれないけど。

私はその時、お礼を言わなかった。

その後彼と良く遊ぶようになった。何時も年上相手に無茶ばかりしていたお姉ちゃんと私を心配して一緒に居てくれた。

周りから化け物と呼ばれていた私達を心配そうに見つめてくれていた瞳は今でも忘れられない。側にいて、手を握ってくれて時の優しさも忘れてはいない。

そしていつの日か凍津弥はお姉ちゃんを凄く純粋な眼で見つめているのに気づいた。

お姉ちゃんはそのような凍津弥を見て嬉しそうに凍津弥を見ていた。

私はそんな二人を見ているのが嫌だった。

何時からだったのだろうか。あの人が私たちを真っ直ぐに見てくれなくなっただのは。

分かっている。あの事件が起こった後からだ。

殺人事件。

ニュースを見たときは理解できなかった。凍津弥の両親が殺され

た事件。私も何度も会ったことがある、優しく暖いあの人達が殺されたあの日。

あの時は死というものを理解はしていなかったけれど。父さんが泣いていたことは覚えている。あの人前では絶対に弱音をはかないあの人が。凍津弥たちに向けて涙を流していた。

そんな父から彼らとは二度と会えないと言われた時の感情は覚えている。

私は寂しいという気持ちをその時初めて知った。

私と繋がる、凍津弥と繋がる人が減ってしまったことを寂しいと思ったのだ。

そんな寂しさしかない感情の中、朗報があった。

凍津弥は生きていた。彼が生きていると言うことを聞いたとき、私は生まれて初めて泣いた。

けれどその嬉しさは一瞬で覆った。

彼は入院していた病院から行方不明になった。大勢の大人たちが探しても一向に見つからなかった。

私もお姉ちゃんも皆で探した。何日も何日も。それでも彼はどこにも居なかった。

もう会えない。そう思っていた。

私は彼に助けて貰ったことへのお礼も、別れも言えなかったことをずっと後悔していた。

そして一年後。周りから死んだと思われていた彼はいきなり帰ってきた。

前触れも無く、突拍子もなく。

とても似合う豪華なドレスを着て。

その後、私はお爺ちゃんから話を聞いた。

そのときは良く分からなかった話を。今はもう理解して、納得している話を。

まあ今でも全てを理解しているとは言い難い。

けれど彼が特別になった、ということだけはわかった。

私の家の秘密。お姉ちゃんが背負って行かなければならない秘密。彼は自分でも知らない内にそれを背負って行った。

彼自身は未だ知らない。私達が一生をかけて守らなければならなかったものごとを。

陽元という家が、何千年も守り続けてきたものの存在を。

それは私たちの人生を短い時間で終わらせる筈だった『鍵』。

彼は私達の変えられるはずのない運命をあつさりと変えてしまった。

私達が大人になる前に、命を捧げて鎮めなければならなかったものを背負っていった。

そんな彼と面と向かって再会したのは中等部に入学して一週間が経った時のことだった。

友達やその家族は彼に対する様々な噂や嘘を並び立て「あれに近づくな」と囁いてたてていた。

彼に対する根も葉もない噂はとても酷い物だった。

彼は中等部に入学した当初、虐めを受けていた。思い出すのも苛立たしくなるような陰湿ないじめを。

私はそんなことを気にせず凍津弥の傍に寄った。例え他の誰に何を言われようと気にせず。最もらしい理由に彼の監視、というお姉ちゃんからの命令を使って彼と一緒に居続けた。

何時かあの時のお礼を言うために。

けれど彼は私なんて必要としてなかった。

私が何もしなくても彼は自然と虐められなくなった。

それは彼が何かをしたわけではない。けれど彼の人を惹きつける輝きがそうさせたことだ。

彼が惹きつけた陽元美刃と言う人の輝きが、彼から虐めを消し去

ったのだ。

居なくなる前よりも眩しくなったけど寂しいと感じる笑顔と優しいさで。

時々しか学園に来ないくせに。

会えなかった三年間で。

今は私の斜め前の席で。

彼は今も別人のように輝きを増している。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4236y/>

---

君の世界の輝きは

2011年11月24日23時55分発行